

アリストテレス『形而上学』A（第一）巻第一章～第三章 ——訳と注解——

Aristotle's *Metaphysics* A 1-3: Translation and Commentary

坂 下 浩 司

Koji SAKASHITA

凡 例

この翻訳の底本は Primavesi 2012 であり, Ross 1924 および Jaeger 1957 と比較した。邦訳は、『形而上学』については, 全訳2種（岩崎訳, 出訳）, 部分訳2種（藤澤訳, 川田訳）を参照した。その他は, 基本的に, アリストテレスは, 京都大学学術出版会の「西洋古典叢書」にあるものはそれを, その他は岩波書店の「新・アリストテレス全集」版を, ソクラテス以前哲学者の「証言」や「断片」は, 同書店の『ソクラテス以前哲学者断片集』を, プラトンは, 前記「叢書」にあるものはそれを, その他は岩波書店の「プラトン全集」を, 上記の哲学者以外の著作家の邦訳は, 「叢書」版を, そこにないなどの場合は岩波文庫版を用いた¹⁾。

1) 謝辞：今回の拙訳のモットーとなったのは, 翻訳も多く手がけた詩人で随筆家の長田弘さんの言葉「ただ概念でしかないものを, / 確かな感触をのこすことばとして, / ……実感できるものに変えていく」（「夏の午後, ことばについて」, 2015, 605, 強調は引用者）であった。そのために, 2021 年度春学期 Q2 のたまたま対面に戻っていた学部の授業「応用哲学 B（現代形而上学と古代形而上学）」で, この原稿を試用し音読してもらった。「哲学」「観想」「驚嘆」「実体」「付帯性」等々は, どうも学生さんたちの頭のなかで上滑りしたり空転したりしているようであった。そこで, 「確かな感触をのこす」代案を教室でいろいろ考えたりした。参加した学生さんたちの忌憚ない意見に学ぶところは大きかった。また, Zoom での研究会につきあってくださった院生の野村雄一さんとソクラテス以前の哲学（とりわけ古代原子論）の研究者和田利博さん, 中世哲学研究者の藤本温さんにも感謝いたします。

A（第一）巻

第一章

[980a21] どんな人間でも「知りたいという欲求」をもつが、これは生まれつきだ²⁾。その証拠に、様々な感覚が愛好されている³⁾。実際のところ、感覚は、役に立つということを離れても、それ自体のゆえに愛され、またとりわけ眼によるそれが好まれる。というのも、私たちは、何かをするためだけではなく、何もしようとはしていないときさえ、その他の言わばあらゆる感覚にまさって「見ること」を選んでいるから⁴⁾。そしてその理由は、様々な感覚のうちでは視覚が、私たちに最もよく何かを知らせ⁵⁾、その多くの「違い」を明らかにするということなのだ⁶⁾。

[980a27] それで、生まれつき感覚能力をもつのが動物であり⁷⁾、感覚から記憶は生じない動物がいる一方で、記憶が生じる動物もいる。[980b21] それだからこそ、記憶することができない動物と比較すると、その一方は利口なものであり、他方は学習することに適したものである⁸⁾。音を聴くことができない限りの動物は（たとえばミツバチ⁹⁾、他にも何かそのような動物の種族¹⁰⁾がいればそれも）利口なのだが学習することはなく、記憶に加えて聴覚をも有する限りの動物は学習

2) 「知恵の愛好・愛知（ピロソピアー）」の萌芽。

3) 「知識は感覚から出発する」という前提がある。

4) 「言わば」という限定は、次の段落で分かるように、声を使って何かを「学習すること [教え込まれること]」との関係では視覚よりも聴覚が大切になるから（『自然学小論集』第一論考「感覚と感覚されるものについて」第一章四三七 a 三～一七を参照）。

5) この箇所の「知る」の原語は「グノーリゼイン」で、「認識する」という専門的な狭い意味もあるが、ここでは、私たちが生まれつき欲求しているところの「知ること（エイデナイ）」の始発形態としての「感覚のはたらき」のことであり、専門的ではない広い意味である（後の九八一 a 一六で名詞形「グノーシス」がやはり非専門的な意味で登場する）ので「知る」と訳した。なお、「何かを」と訳した原語「ティ」を底本は（Ross や Jaeger も）読まないのだが、拙訳は採用した。理由については、「Met.A のテキスト註 01」を見よ。

6) 事物の「違い」の識別に関して視覚が他の感覚より優れているのは、物体の色（視覚に固有な対象）を通じて諸感覚に共通な対象（大きさ・形・動・数など）をも知らせるから（四三七 a 三～一七）。見ることがもたらす多くの違いの「多」をどのように統一的に把握し「一」へもたらすかという課題が、「知ること」の次の形態すなわち「経験」へ受け渡される。

7) 動物の特徴としては「みずから動く」ということもある。しかし、おそらく、アリストテレスがこれから提唱する「知恵の追求・愛知（ピロソピアー）」を勧告するという非生物学的な目的のため、「知る」トピックに議論が制限されている。

8) ここでは原文が従来とかなり異なる。詳しくは、「Met.A のテキスト註 02」を見よ。

9) 「ミツバチ」に関して、『動物誌』第八（第九）巻第四〇章では、もっと慎重に、「聞いているのかどうか総じて明らかではない」とされている（六二七 a 一七～一八）。

10) 原語は「ゲノス」で、「^{るい}類」とも訳す。『動物部分論』第二巻第四章では、ミツバチとともにアリが挙げられている（六五〇 b 二六）。

することがある¹¹⁾。たしかに、一方で、人間以外の動物は、表象のはたらきや記憶によって生きるが¹²⁾、それらが経験にあずかることは少ない¹³⁾。他方で、人間の種族は、技術や様々な推論によっても生きている¹⁴⁾。ところで、人間には、記憶から経験が生じている。実際、多くの記憶は、同一の事柄に属して、[981a]一つの経験という力を発揮させるからだ¹⁵⁾。経験は知識や技術とほとんど似たものだと思われてさえているが¹⁶⁾、しかし経験を通じて知識や技術が人間のものになる。ポロス¹⁷⁾の主張では、経験は技術を、無経験は運まかせの態度を作り出したのだが、彼がこう言うのは正しい。

さて、技術が生じるのは、経験に属する多くの思考内容から、普遍的な一つの判断が、複数の類似物について生じることができたときだ。つまり、「この病気にかかっている場合、カリアスにはこの処置が適していたし、同様に、ソクラテスにとっても個別の多くの人びとにとってもそうだった」と判断するのは、経験のすることである。[981a10]しかし、「体質の一つの類型によって他の体質から確固として区別される『これこれの体質』をもったすべての人にとって、この病気にかかっているという場合に——たとえば『粘液質のあるいは胆汁質の¹⁸⁾』すべての人にとって、熱病で体が燃えるように熱くなっている場合に——この処置が適していた」と[普遍的に]判断するのは、技術のすることである。

それで実際のところ、行為するということに関してなら経験は技術と何も違わないと思われており¹⁹⁾、そればかりか、経験を積まずに理屈しか知らない人よりは、経験を頼りとするの方が、ずっとうまくやれているということすら、私たちは目にしている²⁰⁾。(その理由は、経験が個別に関わる

11) ここで「利口なもの(プロニモン)」は人間だけではなくそれ以外の動物も含む。それゆえ、『ニコマコス倫理学』第六巻などの、人間に固有な、狭い意味の倫理的な力である「思慮(プロネーシス)」があるものではなく、広い意味で「考える力のある」ものを意味していると理解した。「考える」ことが「記憶」を前提するのは、複数の物事・事柄を次々に想い起こして保持しつつ、それらを結びつけていくことが、すなわち、広い意味で「考える」ことだからであろう。しかしここで、「たとえ聴覚を欠いていても、記憶ができるなら学習は成り立つのではないか?」という疑問が生じる。これについては、「Met.A.1 補注 a 聴覚、記憶、学習(教え込まれるということ)」を見よ。

12) 詳しくは、「Met.A.1 補注 b 表象と記憶について」を見よ。

13) 「少ない」と訳した原語は「ミークロン」であり、ポジティブに解して「少ない(つまり少しある)」と訳すことも、ネガティブに解して「ほとんどない」と訳すことも可能である。詳しくは、「Met.A.1 補注 c 980b27の「ミークロン」」を見よ。

14) 前文の「記憶」の話題とこの「推論」の話題の関係が少し分かりにくいかもしれない。「Met.A.1 補注 d 記憶・(想起・思案)・推論」を見よ。

15) 「同一の事柄」とは何であるかという問題は重要だが、ここでは詳しく論じることができない。(人間が他の動物にはない思考の力——「推論」の力——で)一つの事柄と関係させなければ、雑多な個別の記憶だけでは、一つの経験は成立しないという点を押さえておけばよい。以下の「経験」の例(九八一a七~九)も参照。

16) 以下の九八一a一三にも「経験は技術と何も違わないと思われており」という言葉がある。

17) シケリア島のアクラガス出身で、有名なソフィストであったゴルギアスの弟子。プラトン『ゴルギアス』に対応する箇所がある。ほんのちょっとした言及に見えるが、実はそのままの形では出てこず、四四八C、四六二B~Cをまとめたもの(プラトンの著作を知っている者にはすぐに思い当たるようにしてあるわけである)。

18) 冷たい粘液と熱い胆汁とは性質が正反対なため、それぞれの体質の人で当然対処は異なる。粘液質の患者と胆汁質の患者とで症状が異なるといった議論は、たとえばヒポクラテスの『神聖病について』第一五節を見よ。

19) プラトン『メノン』九七A以下(有名な「ラリサへの道」の箇所)を参照。

20) 専門家は「Met. A のテキスト註 03」を見よ。

知であるのに対して、技術は普遍に関わる知なのであるが、行為や生成はどれも個別に関わっているということだ。つまり、[技術を身につけた人である] 医師は、「人間」なるもの²¹⁾を健康にしているわけではないから。ただ、「伴う」という仕方であらう、そうしていると言える。カリアスやソクラテス、他にも [981a20] そのように個別の名前で呼ばれる誰か [個別の病人] に「人間であること²²⁾」が伴っているのだから²³⁾。それで、もし誰かが経験を積まずに理屈しか知らないならば、すなわち普遍は知っているのに普遍に含まれる個別に無知ならば、この者はまるで見当違いな治療をたびたびしてかすことだろう。なぜなら、治療されるべきはむしろ個別のものだからだ。

しかしそれにもかかわらず、少なくとも「知っている」つまり「知識がある」ということは、経験よりも技術にこそ、いっそう多く属すと私たちは思っている。また、技術を身につけた人の方が、経験に頼る人よりも、もっと知恵があると判断している。以上からうかがわれるのは、どんな人にも、「知っている」ということに関わって、いっそう知恵はそなわるとのことだ²⁴⁾。それは、一方が原因を知っているのに対して、他方は知らないからである。実際、経験に頼る人は、「現にこうだ」ということを知っていても「なぜか」は知らず、他方、技術を身につけた人は、「なぜか」ということを、[981a30] すなわち原因を認識しているのだ。

だから、各々のことについては、指図する親方こそが、[981b] 指図されて手を動かすだけの職人よりも²⁵⁾、もっと尊敬に値し、また、もっと多く知っているのであって、つまりは、もっと知恵があると私たちは認めているわけである。それは、指図する親方こそが、ものの作られるそれぞれの原因を知っているからに他ならないが（それに対して、指図されて手を動かすだけの職人は、ちょうどいくつもある「生きてはいないが何かを作る」ものようであって、自分が作るものを、知らないままに作る²⁶⁾。これは火が何かを燃やすのに似ている²⁷⁾。ただし、「生きていないもの」が、[始めからもっている] 何らかの自然本性によってそれぞれのはたらきをなすのに対して、指図されて手を動かすだけの職人は、[後から身につけた] 習慣ゆえになしているのだが）、このことからうかがえるのは、指図する人の方が、いっそう知恵があるのは、何かをなす能力が身についている人であることによってではなく²⁸⁾、むしろその人自身が理屈を知っており、つまりは原因を認識していることによるということだ。一般に、知っている人と知らない人との区別を示すのは、知っている人は教えることができるという点である²⁹⁾。それゆえにこそ、技術の方が経験よりも、いっそう知

21) 普遍的な人間のこと。

22) 人間の本質のこと。

23) 「～が……に伴っている（または、『～が……と一つになっている』）」の原語は動詞「シュンベベーケン」。これが、おなじみの「付帯性（ト・カタ・シュンベベーコス）」の元にもなっている。ここでのポイントは、治療の直接的対象は個別の病人ソクラテスであって、その病人ソクラテスが人間である（個別の病人に「人間である」ことが伴っている）から、「人間なるもの」（すなわち人間の本質）が治療の間接的对象になるということ。

24) 本章での「ソピアー」という名詞の初出例（九八七a二七）。

25) 「指図する親方（アルキテクトーン）」と「指図されて手を動かすだけの職人（ケイロテクネース）」の対比は、プラトン『ポリティコス』二五九E以下の「アルキテクトーン（指示する者）」と「エルガティコス（はたらく者）」、「グノーシス（知）」と「ケイルールギアー（手仕事）」の対比を参照。

26) 「[ものの作られるそれぞれの原因・理由を] 知らないままに作る」ということ。

27) 「火が何かを[何のために燃やすのかその理由を知らないまま] 燃やすのに似ている」ということ。

28) この点は、当の技術を身につけた人はみな同じであろう。

29) プラトン『アルキビアデス（一）』一一八D「およそ何かの知識をもっている人については、他人をもその知識

識であると私たちは思っているのだ。実際、技術を身につけた人は教えることができるのに、経験に頼る人はそれができない。さらに、[981b10] 私たちは、いかなる感覚も、知恵であるとは考えていない。とはいえ少なくとも、個別のものを認識する際に最も力を発揮するのは、感覚である。だが、それが告げるのは、いかなるものについても、「何ゆえか」、たとえば「何ゆえ火は熱いか」という原因でなく、「現に火は熱い」という事実だけなのだ。

さて、[A] 一方で、[万人に] 共通のものである感覚とは懸け離れた技術を何であれ最初に発明した者が人びとに驚かれ感銘を与える³⁰⁾というの、ありそうなことだ³¹⁾。それは単に、発明されたもののなかには、役立つものが何かあるからというだけではなく、そのような技術の発明者が「知恵ある者」であってその他の者とは違うと考えられたからだ。[B] 他方で、発明される技術は多々あり、「せざるを得ないこと」のための技術もあれば、それ自体が目的となることに打ち込んで楽しく過ごすこと³²⁾のための技術もあるが、後者の技術の発明者の方が、常に、いっそう知恵があると判断されている。なぜなら、その者の知識は、[981b20] 役立てることを目的としてはいないからだ。[C] したがって、そういったものすべてがすでに準備されてしまったときに³³⁾、快樂のためでも「せざるを得ないこと」のためでもない知識が発見されたのである。すなわちそれが最初になされたのは、「せざるを得ないこと」から解放された人たちのいる地域なのだ。それゆえ、エジプトあたりで数学的な様々な技術が最初に成立したのである。実際そこで、「せざるを得ないこと」から解放されること³⁴⁾が許されていたのは、神官たちの集団なのであるから³⁵⁾。

ところで、技術や知識やその他の似た種類のものの違いは何かということについては、品性に関わる議論のなかで語られた³⁶⁾。しかし、私たちが現在行っている議論は、次のような結論を示すこ

をもつ者にすることができれば、むしろ、それがその知識をもっているということのりっぱな証拠になると思うのだ(田中訳に準拠)。

30) 「人びとに驚かれ感銘を与える」(タウマゼスタイ)という、次章(九八二b一―二を参照)につながる重要な論点がすでにここで登場している。

31) 「ありそうなこと」は、典型的には、弁論術で用いられる「トポス(論点)」であり、本章と次章が、自説の説得——自分が考える「知恵の探求」の勧告——にあることを暗示している。

32) 文脈を考慮し敷衍して「それ自体が目的となることに打ち込んで楽しく過ごすこと」と訳した原語は一語の「ディアゴージェ」で、この言葉自体としてはニュートラルに「ときを過ごすこと」や「営み」の意。

33) 『トピカ』第三卷第二章一八a六―一三を参照。

34) 『「せざるを得ないこと」から解放されること』と意識した原語は、一語の動詞「スコラゼイン」で、この言葉自体としては「スコレーにおいてあること」の意。「スコレー」は、『ニコマコス倫理学』第一〇卷第七章で「幸福がそれに存すると思われているもの」とされており(一一七七b四)、従来は、「よゆう」や「ゆとり」、「余暇」などと訳されてきた。要するに、何かの手段として「せざるを得ないこと」から解放され、それ自体が目的であることに心ゆくまで打ちこめる、「せかせかしていない時間」のこと。

35) エジプトにおける数学の発生の仕方に関しては、ヘロドトスの『歴史』第二卷一〇九における、ナイル川の氾濫と土地の再測量の実際的な必要性からの「測地術ないし幾何学」の発明の説がよく知られている。しかし、当時よく——アリストテレスにも——知られていたはずのヘロドトス的な「実際的な必要性から連続する数学の発生」の説明は、ここでの「実際的な必要性から解放されてからの(つまり実際的な必要性から連続しない)数学の発生」の説明と必ずしもうまくつながらない。この問題については、「Met.A.1 補注 e エジプトにおける数学の発生の仕方の記述の相違」を見よ。

36) 『ニコマコス倫理学』第六卷第三～七章で議論されている内容がこれに対応している。

とを最終目標としている。すなわち、「『知恵（ソピアー）』と名づけられるものは、第一の原因や始原に関わるのだと人びとはみな判断している」というのが、私たちの目指す結論なのだ。そうであればこそ、先に述べられたように、[981b30] 経験を頼りとする人の方が、どんな種類のものであれ感覚をもつ人よりも、いっそう知恵があると思われており、技術を身につけた人の方が、経験に頼る人よりも、また、[技術を身につけた人たちのなかでは] [982a1] 指図する親方の方が、指図されて手を動かすだけの職人よりも、そして、「見極めることに関わる諸学問³⁷⁾」の方が、「作ることや行うことに関わる諸学問³⁸⁾」よりも、いっそう知恵があると思われているのだ。

さて以上から、「知恵」というものが何らかの種類の原因や始原に関わる知識だということは明らかになったわけである³⁹⁾。

第二章

[982a4] ところで、そのような知識⁴⁰⁾を私たちは探求しているのであるから、考察されねばならないのは、次のこと、すなわち、どのような原因に関わる、つまりどのような始原に関わる知識が「知恵」であるのかということであろう。それでもし、「知恵ある者」について私たちがしている様々な判断が取り上げられるなら、その考察に基づいてもっと明確な答えが出せるようになるだろう⁴¹⁾。

そこで、私たち⁴²⁾がしている判断の第一は、こうである⁴³⁾。すなわち、[判断一] その知識の対象

37) 従来、「テオーレーティケー」は「理論的・観想的な学問・知識」などと訳されてきたが、本章と次章のような勧告的文脈ではイメージしやすく柔軟に、「(何らかの物事・事柄の真相や真理を) 見極めることに関わる学問・知識」と訳した。それ以外の文脈では、従来の訳語との連絡をつけるため、「見極めることに関わる理論学」としたり、簡潔に表現したい場合には従来通り「理論学」としたりした。元にある名詞「テオーリアー」もやはり「観想」とはせず、また無理に漢字二文字の言葉をあてることもせず、「見極めること」や「見極めている思考活動」などと柔軟に訳すことにした。

38) 原語は「ポイエーティケー」で、直訳は「作ること（ポイエーシス）に関わる学問・知識」。しかしここでは、「行うこと（プラークシス）」も含まれていると解した。従来は「制作学」や「実践学」と訳されてきた。こちらの従来の訳語も簡略さが必要な場合は使った。

39) 知恵の対象が第一の原因や始原であるということは、本章ではまだ結論できていないことを示している。

40) 前章末で明らかになった「何らかの種類の原因や始原に関わる知識」としての「知恵」のこと。本章は前章の議論の完全な継続である。

41) 『ニコマコス倫理学』第六巻第五章と同様の方法が採られている。「『思慮』については、私たちがどのような人びとを『思慮ある人たち』と呼んでいるのかを見極めたなら、それによって把握できるであろう」（一一四〇 a 二四～二五、朴訳に準拠）。

42) 以下に挙げられていく「判断」は、アリストテレスの「ディアレクティケー（哲学的問答法）」の出発点となるいわゆる「通念」に相当し、以下のような「判断をしている私たち」は、前の段落の「探求をしている私たち」のようにプラトンの著作に親しんできた人たちだけではなく、より広く——ここでの探求に直接に従事してはいない——一般の人びとも含んでいると考えられる。

43) 「判断一」に対応するプラトンの箇所としては、『国家』第五巻四七四 C から始まる、「何かを愛する」者とは、「その何かの一部を愛するが別の一部は愛さない」者ではなく、「その『まるごとすべて（パーン）』を愛する」者だと

が何にもまして「すべての事物〔万物〕」でありそれらを可能な仕方⁴⁴⁾対象としているのが「知恵ある者」だということ⁴⁵⁾、この者はそれらのこまごました個別のことの知識をもつのではないこと⁴⁶⁾。[982a10] 次に、[判断二] いろいろとむずかしいことを知ることができる者、すなわち人間にとって知るのがやさしくはないことを知ることができる者、その者こそは「知恵ある者」だということ（実際、感覚するということなら万人に共通であって、それゆえやさしい。つまり、「知恵ある者」だと判断される根拠に全くなならない⁴⁷⁾）。さらに、[判断三] どんな知識についても、いっそう厳密である者や [判断四] 原因についていっそうまく教えることができる者の方が、もっと知恵があるのだということ。そして、諸々の知識のうち、[判断五] 「知識を目的として、すなわちそれを知ることのために選ばれる知識」の方が、「知って得られる成果を目的とする知識」より、もっと知恵にふさわしく、[判断六] また、「いっそう始原・支配に関わる⁴⁸⁾知識」の方が、「従属する⁴⁹⁾知識」より、もっと知恵に値すると、私たちは判断している。「知恵ある者」は、命令されるべきではなく命令すべきであるし、また、他の者にしたがうべきではなく、より知恵のない者の方が「知恵ある者」にしたがうべきなのであるからだ。

それで、[982a20] 「知恵」つまり「知恵ある者」について私たちがしている判断は、以上のようなものであり、以上の数だけある。さて、それらのうち、[判断一と対応する論点一] 「すべての事物〔万物〕を知っている」ということは、普遍的な⁵⁰⁾知識を最も有している者に必然的に属している（なぜならこの者は「[その普遍的な知識の] 下に置かれた実例⁵¹⁾」を或る意味ですべて知っているのだから⁵²⁾）。そして [論点二] 概して言えば、それらすなわち最も普遍的なことごとを認識す

いう議論、とりわけ、四七五Bの「哲学者（愛知者）もまた、知恵を欲求する者として、或る種の知恵は欲求するが或る種の知恵は欲求しないと言うのではなく、知恵を『まるごとすべて（パーサ）』欲求する人である、と言うべきだろうね？」（藤澤訳に準拠、一部言葉遣いを変更）という部分が下敷きになっているようである。

44) アレクサンドロスの解釈では、「共通で普遍的な仕方で」、「包括的な仕方で」（Alex., 9, 29-30）。

45) 判断一と二では比較級の「いっそう」や最上級の「最も」という言葉が使われておらず端的に述べられている（判断三〜六では比較級が使われている）。一と二が基本的な判断なのであろう。

46) 「この者はそれら [すべての事物・万物] のこまごました個別のことの知識をもつのではない」という文は、二つの仕方⁴⁴⁾で解される。詳しくは、「Met.A.2 補注 a 九八二 a 九〜一〇の『こまごました個別のことの知識をもつのではない』について」を見よ。

47) 「つまり」以下に対応するギリシア語はたった二語の「ウーデン・ソポン」。直訳すると、「ソピアー的なこと（ソポン）では全然ない（ウーデン）」で、少し分かりづらい。文脈を考えて意識した。

48) 「始原・支配に関わる」と訳した原語は「アルキケー」で、ここまで「始原」と訳してきた「アルケー」の形容詞形（女性単数形）である。これにはもともと「支配」という意味も含まれていることもあり、ここではその「支配」のニュアンスが前面に出ているが、これ以後も「始原」の意味がなくなるわけではない。それゆえ「始原・支配に関わる」と訳した。

49) 「従属する」のニュアンスについては、「Met.A.2 補注 b 982a17 の「従属する知識」」を見よ。

50) 「普遍的」と通常訳される原語「カトルー」は、言葉の成分に分解すれば、「カト」<「カタ」と「ホルー」<「ホロン」とから成り、単に「全体（ホロン）に関わる（カタ）」という意味。したがって、「カトルー」は、「普遍的」という言葉で通常理解されるような「抽象的」という意味に尽きるわけではない。

51) この「下に置かれた実例」の「下に（ヒュポ）置かれた（ケイメナ）」の意味が少し分かりづらい（いわゆる「基体」ではない）。通常、「[普遍的な知識の] 下に包摂される」・「[普遍的な知識に] 従属する」の意味に解されている。

52) ここで「或る意味で」とは、先述の「判断一」の「（すべて知っているが）こまごましたことまでは知らない」と

るのは人間にとって（感覚からは最も遠いので）最もむずかしいことでもある。また〔論点三〕様々な知識のうちで最も「厳密」なのは、第一のものに最も関わる知識だ。（「基づく始原〔第一のもの〕の数が少なくとも⁵³⁾議論が成り立つ知識」の方が「始原をさらに追加しないと⁵⁴⁾議論が成り立たない知識」よりも、たとえば算術の方が幾何学よりも、いっそう「厳密」であるから。）さらに、〔論点四〕「教えることができる知識」という点も、〔982a30〕原因を見極める知識⁵⁵⁾の方が、いっそうよく当てはまる（教えてくれる人とは、各々のことについて原因を言ってくれる人のことであるから）。また、〔論点五〕他のことを目的としないで知るということや専門の知識をもつということは、知ることが最も可能なものに関わる知識にこそ属するのが最もふさわしい（専門の知識をもつことをそのこと自身のゆえに選ぶ人は、最高の〔982b〕知識をこそ選ぶことが最も多くなるが、最高の知識とは最高に知られうるものの知識なのであるから）。そして、最高に知られうるものであるのは、第一のもの、つまり原因なのである（実際、第一のもののゆえに、すなわち第一のものに基づいて、その他のものの知識が成り立つのだが、「〔第一のもの〕下に置かれたもの⁵⁶⁾」によって第一のものの知識が成り立つのではないから）。また、〔論点六〕諸々の知識のうちでは、「各々のことが何を目的として行われるべきであるのかを認識している知識」が、最も始原・支配に関わるものであり、そして「従属する知識」よりもいっそう始原・支配に関わるものであるのだが、それ〔そのような目的〕であるのは、各々のものの善、また総じて、自然全体における最高の善なのだ⁵⁷⁾。

たしかに、上述のすべての考察に基づけば、私たちが探求中の当の知識の名称「知恵」は同一の知識に当てはまる。なぜならそれは、第一の始原や原因を「見極めることに関わる知識」であるから。〔982b10〕実際のところ、善つまり「目的となるもの⁵⁸⁾」は原因のうちの一つであるから。また、この知識が、「作ったり行ったりすること⁵⁹⁾に関わる知識」でないこと⁶⁰⁾は、初めに知恵を愛し求めた人たちに基づいても明らかだ。実際、人は「驚いて感銘を受けること（タウマゼイン⁶¹⁾）」の

いう仕方だ」ということだと解した。

53) 第一のものだけで、ということ。

54) 二次的・派生的なものがないと、ということ。

55) 前章末尾九八二 a 一と註を参照。

56) これもいわゆる「基体」ではないので少しむずかしい。このように、可知性の点で上位の「第一のもの」（「最高に知られうるもの」）の知識は、論証的に、自然本性的な可知性で劣る二次的・派生的なものによって打ち立てられないという意味に解した。

57) 「各々のものの善」と「最高の善」の関係は、『ニコマコス倫理学』第一巻第一章によれば、階層秩序を成していると考えられ、ここでの「各々のものが何を目的として『行われるべき（プラクテオン）』であるのかを認識している知識」は、同第二章に基づく限り、「ポリティークー（政治学ないし政治術）」にこそふさわしく思われる一方で、「最高の善」に「自然全体における」という言葉が付されていることは、『ニコマコス倫理学』のそれらの章からは読み取れない『形而上学』独自の重要な論点であるとも考えられる。しかし、このことは無視できない問題を引き起こす。詳しくは、「Met.A.1 補注 c ポリティークーとソピアーの平行関係の問題について」を見よ。

58) 次章でいわゆる四原因を列挙している箇所九八三 a 三一の説明を参照。

59) 「〔手段となるものを〕作ったり〔そういったことを〕行ったり」ということ。

60) 前章末尾九八二 a 一と註を参照。

61) 従来の訳語は「驚嘆する」（「不思議に思う」「いぶかしく思う」などとも訳せる）。ここでは、ただ反射的に驚いてそれで終わることではなく、驚いて感動したり感激したり感銘を受けたりし、それが忘れられないでいることのようなのである。本章と次章が「愛知の勧め」となっていることをかんがみ、もっと生き活きとした表現として、

ゆえに今も初めも「知恵を愛し求めること（ピロソペイン）」を始めたのであって⁶²⁾、これは次のような次第であった⁶³⁾。すなわち、分からずに途方に暮れることごとのうち、[I] 最初は、身近なことに驚いて感銘を受けていたのであったが、[II] 次にそのように少しずつ前へ進んでいって、もっと規模の大きなことについて、たとえば、月がこうむっている現象⁶⁴⁾や、太陽や星のあたりで起きている事象について、[III] ひいては、世界万有の生成について⁶⁵⁾、考えぬいて行き詰まるに至ったのである⁶⁶⁾。そして、行き詰まりながら、しかもなお、驚いて受けた感銘を忘れられないでいる人は、自分が無知だと思ひ知る⁶⁷⁾。(それゆえ、「知恵の愛好者（ピロソポス）」は、何らかの意味で「神話の愛好者（ピロミュートス）」でもある。なぜなら、神話というものは、「驚いて感銘を受ける様々な出来事（タウマシア）」から成っているからである⁶⁸⁾。)したがって、彼ら[最初の愛知者たち]は、[982b20] 無知な状態を脱することのゆえに知恵を愛し求めた⁶⁹⁾のであるから、明らかに、知ることのゆえに知識をもつことを追求していたのであって、それを何かに利用することを目的としてそうしていたのではない。彼らの登場と同時に起こったこと自体が、その証人となる。すなわち、[生活に] 必要な種々のものが、また肉体的な苦勞から解放されて快適である⁷⁰⁾ためのそしてそれ自体が目的となることに打ち込んで楽しく過ごす⁷¹⁾ためのことが、ほとんどすべてそなわると、以上のような知が探求され始めたのだ⁷²⁾。それで、明らかなことは、その知を私たちが探求するのは、他に利用するためでは全くないということだ。それはちょうど、「自由人」であるとは、私たちの主

「驚いて感銘を受ける」あるいは「驚いて受けた感銘を忘れられないでいる」などと訳してみた。

62) これは、前章九八一b一三にも出てきていた論点であるが、プラトン『テアイテトス』一五五D「実にその驚異タウマゼイオンの情こそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、求知（哲学）の始まりはこれより他にはないのだ」（田中訳に準拠）を下敷きにしてある。

63) 以下の記述も、「当初は」「次に」「少しずつ前へ進んでいって」という言葉から察せられるように、前章と同じく歴史的な振り返りになっているのが注目される。

64) 月食など。

65) 最後のステップに登場する「世界万有（ト・パーン）」を対象にすることが、「ピロソペイン」の成立要件の一つである（Frede 2008, 517）ことが分かる。

66) 原語の「ディアポレイン」を、ここでは、「考えぬいて（ディア）行き詰まる（アポレイン）」と訳した。特に本書B（第三）巻第一章から前面に出てくる「行き詰まり・困難・難問（アポリアー）を調べ通す（ディア）／それを突破する（ディア）」という意味もあるが、ここでは、難問の精査や突破ではなく、むしろ、次の「行き詰まり（と驚いて感銘を受けている状態）を保持した状態から無知を思い知ることに」の前段階としての、行き詰まることそのものがポイントだからである。

67) ソクラテスの「無知の自覚」を強く想起させる表現（プラトン『ソクラテスの弁明』二一D）。

68) この丸カッコ内の文章は、「タウマシア」から出来た「神話」を媒介にして、「ピロソペイン」と「タウマゼイン」の密接な関係を示す逸脱的な部分。丸カッコの前の「自分が無知だと思ひ知る」という論点は、ここをとばして、次の「無知の状態を脱するため」という論点へとつづいている。

69) つまり、知恵の追求には、なぜかを知ろうとしていったんは挫折し行き詰まりながらもなお放り出せずおのれの無知を思い知るという状態が先行している。逆に言えば、その状態を経験していない者には、「知恵の追求」としての「形而上学」が不可避なものとはならない。

70) 原語は「ラーストローネー」で、意味は「容易であること」「快適であること」だが、特に「肉体的な苦勞から解放されて」のそれであるので、このように意識した。

71) 前章九八一b一八とその訳注を参照。

72) 前章のエジプトの神官たちの話への言及。

張するところでは、その存在する目的が当の人であって他の人ではない者であるのと同じように、様々な知識のうちでただそのようなものだけが「自由な知識」なのである⁷³⁾。実際、その知識だけがそれ自身を目的としているから。ゆえに、その知を所有することは人間にふさわしくないと考えるのは正当でさえあるだろう。なぜなら、人間の本性は多くの点で「奴隸的」なのであり、[982b30]したがって、シモニデス⁷⁴⁾によれば、「おそらく神だけがその特権を享受することだろう。そして人の身であれば」、おのれにふさわしい知識を探求すること「以外」身分相応なこと「はない」そうだから。しかし、もし詩人の言うことにも何か耳を傾けるべきものがあり、つまりは、「本性的に嫉妬するのが [983a] 神的なものである」とするならば、ここで非常にもっともらしく思えてしまうことは、この場合にそれが当てはまるということ、すなわち、この点で秀でた人はみな不幸な巡り合わせにあるということなのである⁷⁵⁾。だが、「神的なものが嫉妬深いものである」などということはありません⁷⁶⁾、むしろ、ことわざの通り、「多くのうそをつくのが詩人というもの」なのであるし⁷⁷⁾、また、上述のような知識以上に尊敬に値するものが他にあるなどと思ってはならない。最も神的な知識が、最も尊敬に値する知識でもあるのだから。そして、そのようであるのが可能なのは、ただ二重の仕方でのみであろう⁷⁸⁾。すなわち、最も神が所有するにふさわしい知識がもしありえたならば、それは神的な知識であり、また、神的な諸存在を対象とする知識がもし何かありえたならば、それも神的な知識なのであるから。そして、この知識だけがそれら両方の特徴を兼ね備えている。神は万物にとっての原因に属し何らかの始原である⁷⁹⁾と思われており、しかもそのような知識をもつのは神だけか、[983a10] 何にもまして神がそうであるかのいずれかであろうから。それで、いかなる知識であれ、この知識よりはずっと [生活に] 必要なものであるのだが、この知識よりもいっそう善い知識など何一つとしてないのだ⁸⁰⁾。

しかしながら、その知識の獲得過程が或る意味で停止すべきなのは、始めの [無知の] 状態からしてきた私たちの探求が、その反対の [知識をもった] 状態へ至ったときである。実際、一方で、

73) プラトン『国家』第六卷四九九A「高尚で自由な討論——知ることを目指し、あらゆる努力をつくしてひたすら真実だけを追求するような討論」、第七卷五三六E「自由な人間たるべき者は、およそいかなる学科を学ぶにあたって、奴隸状態において学ぶということはない」。

74) 紀元前五五七／五五六～四六八／四六七年頃の抒情詩人。引用は、シモニデス「断片」五四二 (Page) の一四行目、そして一五行目一部の「以外」と「はない」（「おのれにふさわしい知識を探求すること」と「身分相応なこと」はアリストテレスの言葉）。これは同時に、プラトン『プロタゴラス』三四一E三および三四四C四の一部でもあることが、ここでは重要である（アリストテレスは前章と本章でプラトンの著作を意図的に多くなぞっているようなので）。

75) 神に嫉妬されるということ。ホメロスなどに見られるギリシア伝統の考えであるが、クセノパネス以来のいわゆる哲学的神学では否定される。次の文で分かるように、プラトンとアリストテレスの神観とも合わない。

76) プラトン『パイドロス』二四七A「神々の合唱隊には、嫉みというものがない」、『ティマイオス』二九E「およそ善きものには、何事についても、物惜しみする嫉妬心は少しも起こらない」。

77) 擬プラトン『正しさについて』三七四A～Bでも「古いことわざ」として引用され、プラトンのスコリアではソロンの詩の断片とされている (26 Hiller = 25 G. -P² = 29 W.²)。

78) 「そして、[知識が] そのようである [最も神的である] のが可能なのは、ただ二重の仕方 [神的である場合] のみであろう」ということ。

79) 知恵の対象であるということ。

80) 『トピカ』第三卷第二章一一八a六～一三を参照。

誰であれ〔知識を獲得しよう〕活動を開始するのは、ちょうど私たちが述べたように⁸¹⁾、「現にこうだ」ということに「驚いて感銘を受けること（タウマゼイン）」からなのだから。たとえば、「操り人形⁸²⁾」についてまだその仕組みを理解していない人たちにとっては「みずから動くもの」だとか、あるいは、「昼夜の長さが変わっていき、その変化に折り返し点があること⁸³⁾」や「正方形の対角線がその辺と同じ単位で測りきれないこと⁸⁴⁾」についてだとか、このようなことに驚いて感銘を受けるように。（後者の場合に「驚いて感銘を受けるのも当然（タウマストン）」だとすべての人に思われるのは⁸⁵⁾、極小でもないものに属する何かが測りきれないということだ⁸⁶⁾。）他方で、それ〔知識の獲得過程〕が終わるべきであるのは、反対の〔知識をもった〕状態、つまりことわざによれば「より善い」状態へ至ったときだ。ちょうど学習を終えたときになる状態もそうであるように。実際、正方形の対角線がその辺と同じ単位で測りきれってしまったなら、そのときほど〔983a20〕幾何学を身につけた人が驚いて感銘を受けることはないであろうから。

さて以上で、私たちが探求している知識の本性は何であるのか、そしてこの探求とそのすべての方法が達すべき目標は何であるのかが述べられたわけである。

第三章

〔983a24〕さて、始めの原因の知識を把握する必要があるのは明らかなのだが（私たちが各々のものを「知っている」と主張するのはその第一の原因を認識していると思うときなのであるから）、原因というものは四つの仕方ですぐられる。それら四つに含まれると私たちが主張する原因の一つは、まず、「根本存在〔本質⁸⁷⁾〕」、すなわち「これこれであるとはそもそも何であったのかという

81) 本章九八二b一二以下。

82) この箇所です「操り人形」と訳した「タ・タウマタ（直訳は「驚かせ感銘を与えるもの）」と次の「タ・アウトマタ（直訳すれば「みずから・自動的に動くもの）」は解釈がむずかしい。詳しくは、「Met.A.2 補注 d 九八三a一四の『タウマタ』と『アウトマタ』」を見よ。

83) 夏至や冬至が存在すること。

84) 無理数が存在すること。

85) 「後者の場合に驚嘆すべきことだとすべての人に思われるのは」の「すべての人に」が広すぎるように見えるかもしれない。詳しくは、「Met.A.2 補注 e 九八三a一六の「すべての人に」について」を見よ。

86) 「極小でもないもの」とは「当然測りきれないはずの大きさをもつもの」のこと。「(小さすぎて測ることができないのなら驚かないが) それほど小さくもないのに測りきれないとは！」と素朴に驚くわけである。信頼度が α 系より低い β 系写本を採用した本文で訳すと、「いくらか小さい単位を使っても何かが測りきれないということ」となる。このように驚くことができるためには、「極小の単位を使えばいかなる大きさでも測りきることができるはずだ」という前提をもっていなければならない。しかし、幾何学を知らない人がこのように洗練された前提をもてるだろうか。有力な α 系写本の本文に含意されるもっと素朴な驚きこそ、ここにふさわしいのではないか。

87) アリストテレスの「知恵の探求（愛知）」における根本語の一つ「ウーシアー」の本書における初出箇所。直後に「ウーシアー」が「本質存在」であることを示す「ト・ティ・エーン・エイナイ」や「ト・ティ・エスティ」が来ている場合、「〔本質〕」と補う。（「根本存在〔本質存在〕」と表記するのは冗長ではないかと指摘があったため。）

こと⁸⁸⁾である。(というのは、「何ゆえにという問いに答える第一のもの⁸⁹⁾」は、つきつめれば「定義(ロゴス)」に帰着するのだが、しかしその「何ゆえにという問いに答える第一のもの」は原因や始原なのであるから。) もう一つの原因は「素材(ヒューレー)⁹⁰⁾」[983a30] すなわち「根底に置かれるもの(ト・ヒュポケイメノン)⁹¹⁾」、三つ目の原因は「動が由来する始原⁹²⁾」、四つ目は「始まりの反対側に置かれた原因」すなわち「目的となるもの(ト・フー・ヘネカ)⁹³⁾」つまり「善」だ。(すべての生成や動の「終局目的(テロス)⁹⁴⁾」であるのは「善」だから。)

こうして、それら四つの原因に関しては、自然についての諸論考⁹⁵⁾のなかで様々なことが十分に見極められたのだが、[983b] それにもかかわらず、私たち以前に存在の考察へとおもむいた人たち、つまり真実について知恵を愛し求めた人たちのことも、ここでは取り上げよう⁹⁶⁾。なぜなら、明らかに彼らもまた何らかの始原や原因のことを語っているからであって⁹⁷⁾、だから、彼らの見解を立ち入って論じる⁹⁸⁾人々には、現在遂行中のこの探求に何か資するところがあるはずなのである。つまり、何か別の種類の原因を見つけることになるか、そうでなければ、いま述べられている四つの原因への私たちの信頼がいっそう増すことになるからだ⁹⁹⁾。

それで、最初に知恵を愛し求めた人たちのうち大多数は¹⁰⁰⁾、「素材」の種類に入るような原因だけを万物の始原だと考えたのであった。すなわち、存在するすべてのものが、それから成り立つ

88) 原語は「ト・ティ・エーン・エイナイ」。いわゆる「本質」を表し、「形相因」に相当する。

89) 原語「ト・ディア・ティ・プロトン」を意識した。「何ゆえに・なぜ」という疑問に答えるいわゆる「原因」を表す(「プロトン」は「第一」)。

90) いわゆる「質料因」に相当する。

91) 従来「ト・ヒュポケイメノン」は「基体」と訳されていた。しかしこれは、物質的であろうとなかろうと、そのつどの考察に対応して根底に置かれたり基礎とされたりする事柄や事物という関係概念である。したがって、「基体」という言葉が喚起しやすい、それ自体で同定できる「物質的な素材」のことを思い浮かべるとうまく理解できない場面にしばしば遭遇する(たとえば前章では九八二a二三やb四)ので注意が必要である。

92) いわゆる「始動因」・「運動因」に相当する。

93) 直訳は「そのために[別の何か]があるところの[目的となる]もの」(すでに前章の九八二b一〇に登場していた)。いわゆる「目的因」に相当する。

94) 「テロス」には、単に「終わり」という意味と、「目的」という意味がある。

95) 『自然学』第二巻のこと。

96) 四原因について理論的に見極めるといふよりむしろ過去の著名な人物の考えを通じて歴史的に再調査——或る意味で言わば「帰納的に考察——しよう、ということか。

97) 先ほどの「私たち以前に存在の考察へとおもむいた人々」や「真実について知恵を愛し求めた人々」は過去形(アオリスト形)が使われていたのに、この箇所の「明らかに彼らも何らかの始原や原因のことを語っている」は、「語った」ではなく現在形になっている。不思議に思われた方は、「Met.A.3 補注 a 過去の愛知者に言及する時制について」を参照されたい。

98) 原語は「エベルテイン」で、同じ言葉がB(第三)巻冒頭に、また同系統の言葉が本巻のまとめである第一〇章末尾のB巻へのつなぎと考えられる重要な部分に登場しており、本巻とB巻との研究方法上の密接な関係を示唆している。

99) 以下で始まりしかも本巻の大部分を占める「哲学史」のセクションの存在理由の言わば公式説明が、この一文である。

100) 少数の例外を示唆する。「ト・アペイロン」を唱えたアナクシマンドロスか(以下の九八四a五～一六で彼の名が挙げられていない)。

ており、また、それから生じてくるところの「最初のもの」にして、しかも、それへと滅していくところの「最後のもの」でもあって、[983b10] この根本存在¹⁰¹⁾は、一方で根底にとどまりながら¹⁰²⁾、他方で「こうむる状態¹⁰³⁾」の点で変化するわけだが¹⁰⁴⁾、彼らは、これこそが根本要素¹⁰⁵⁾であり、存在するものの始原であると主張するのであって、まさにこのことのゆえに、それ自体は生成することも消失することもないと彼らには思われるわけだ。その理由は、このような自然本性のものが常に保存されているからなのだ。たとえば、私たちが主張しているように、ソクラテスは美しくなったり文芸の素養がある人になったりするときでも端的な意味で生じる¹⁰⁶⁾のではないし、一度もったそれらの性質を失ったときでも端的な意味で消えさせた¹⁰⁷⁾のではないのだが、それは、ソクラテス自身が、「[この場合の変化にとって] 基礎とされるもの」として、根底にとどまることによる。このようにして、その他の事物もまた何一つとして生成も消失もしない [と彼らには思われるわけである]。なぜなら、何らかの自然本性のものが存在する必要がある、これは一つであるか、一つよりも多いかだが、これから他のものが生じる一方で、これ自身は保存されているからなのである。

しかしながら、そのような始原の数の多さと種類¹⁰⁸⁾について同じことを [983b20] すべての人が述べているわけではない。このように知恵を愛し求めることを始めた人タレス¹⁰⁹⁾は、それを「水(ヒュドール)」だと主張する。(それゆえ彼は大地でさえも水の上にあるという見解¹¹⁰⁾を表明した

101) 本書における「ウーシアー」という語の二度目の出現箇所。

102) 先の九八三a三〇と後のb一六に登場する「ヒュボケイメノン」と同じ「ヒュボ(下に・基礎に・根底に)」をもつ言葉「ヒュボメネイン」が効果的に用いられている。

103) 「こうむる状態」の原語は「パテー〔複数形〕」(単数形は「パトス」)。動詞「パスケイン」(直訳は「受け取る」「こうむる」)に由来する。

104) この文章の始まりの部分(「すなわち」)からここまではアリストテレス自身の考え(『自然学』第一巻第七章を参照)を述べたもの。

105) 原語は、単数形「ストイケイ・オン」、複数形「-ア」。プラトンにおいて言葉の構成要素である「アルファベット・字母」を表し、それとの関係で比喩的に任意の複合物の構成要素を表すようになった(『テアイテトス』二〇一E参照。「ストイケイア(字母)のようなもの」という言い方がなされている)。アリストテレスの時代には、ほぼ後者の意味になった。次章の最後で原子が字母を例(おそらくデモクリトスからの)にして説明されているのは、こういった背景からすると極めて自然。

106) いなかったが生まれるということ。

107) 死んでいなくなるということ。

108) 始原の「数の多さと種類」という言いまわしは、プラトンが『ソピステス』において記述したいわゆる「プロト＝ドクソグラフィー」(アリストテレスを含めたその後の学説誌記述の原型になったもの)で用いた表現「ある(実在する)ものが、どれだけの数あって、どのような性質のものであるか」(二四二C五～六、藤澤訳に準拠。二つ目と三つ目の強調は引用者)を受けついでものだと考えられる。

109) 「ミレトス学派」の祖、ギリシア七賢人の一人。ヘロドトスの『歴史』第一巻第七四節にタレスが日食を予言したという記事があり、そこから紀元前六世紀初頭に活躍していたと推定される。

110) タレスの「証言」一四と一五(DK)に同様の見解が見られる。「大地でさえも」とは、木材やそのたぐいのものが水の上に浮くように「大地でさえも」という意味に解した。「証言」一四が採られているアリストテレス『天について』第二巻第一三章の該当箇所を読むと、アリストテレスはそんなことがありえないということを議論している。「それゆえ」の文は、そのような、ありえない——「証言」一五のセネカの資料では「馬鹿げている」とさえ言われている——ことを起こすほどの言わば不思議な力が水にあるとされているからには水が始原とされていると推測できる、という根拠を述べているのだと思われる。

のだ。) この判断は、おそらく次のような観察から得られたのであろう。すなわち、万物を養い育てるのは湿ったものであり、それから熱さそのものも生じるのであって¹¹¹⁾、これによって「生きもの(ゾーオン)」は「生きている(ゾーン)」という観察からであろう。(そして「万物が」それから生じてくる場所のそのものこそ「万物の始原」なのである。)それで、以上のことのゆえに先の判断が得られたのであろうし、万物の種子は湿った自然本性をもつということのゆえでもあろう¹¹²⁾。そして水は、湿ったものにとって、その自然本性の始原なのである。

[983b27] ただ、非常に古い時代、今の世代よりもずっと大昔に神々のことを語った最初の者たちも、以上のような仕方でも自然 [983b30] について判断したと思っている人たちがいる¹¹³⁾。つまり、オケアノスやテテュス¹¹⁴⁾が、詩に歌われたところでは、生じるものの祖であり¹¹⁵⁾、また神々がそれにかけて誓いを立てるところのものが水、すなわち、彼ら詩人たちによって「ステュクス¹¹⁶⁾」と呼ばれる河なのであって¹¹⁷⁾、最も古きものは最も尊ばれるものであり、最も尊ばれるものはそれにかけて誓いを立てられる当のものなのだから、というのである。それで、[984a] 自然についてのこの見解が何か原始の時代からある大昔のものであったかどうかは、明らかにできるような種類のことでは、たぶんないだろう。しかしながら、タレスはこの仕方でも「第一の原因」に関して見解を表明したと言われている。なぜかと言えば、一方でヒッポン¹¹⁸⁾を、ここで取り上げる人たちの列に

111) 『気象論』第二巻第二章三三四 b 三三以下では、「太陽が湿ったものによって養われていると判断した昔の人びと」が「こっけいだ」と評されおり、彼らがそう考えた理由としては「湿ったものは火にとって唯一の栄養であるから」というものが挙げられている。

112) この推測が成り立つためには、タレスが万物を何らかの意味で「生きている」とか「魂をもつ」とか思っていたのでなければならない。実際、タレスの「証言」二二 (DK) には、「また或る人たちは、魂が宇宙全体に混在していると言っている。それを踏まえて、おそらくタレスもまた万物は神々に満ちていると考えたのであろう」とあり、二三 (DK) には、「タレスによれば、… [中略] …万有は生きているとともに神霊に満ちている」とある。

113) プラトン『クラテュロス』四〇二 B「ホメロスだって… [中略] …/『神々の生みの親 [父] オケアノスと母テテュス』/と言っているのだ。それからヘシオドスもそうだとぼくは思う。それからオルペウスもたしかこう言っているね。/『美しく流れるオケアノスが先ず結婚して/同母妹テテュスと結ばれた』(水野訳)、『テアイテトス』一五二 E「ホメロスはすなわち/『神々の生みの父なるオケアノスとその母テテュス』/と言って……」(田中訳)、同書一八〇 C～D「それはもう大昔の人たち… [中略] …彼ら古人は、オケアノスとテテュスとがそれ自らを除く他のいっさいを生産するものであり… [中略] …自分たちの考えを、詩(仮作)の形式を用いることによって、大多数の者には気づかれぬよう隠しておったのです」(田中訳)を参照。

114) 太古の河の神。

115) ホメロス『イリアス』第一四歌二〇一行目「神々の祖(おや)オケアノスと、母なるテテュス」、二四六行目「よろずの神の祖であるオケアノス」を参照(『イリアス』からの引用は松平訳)。カーク/レイヴン/スコフィールド(邦訳二四頁)によれば、ホメロスにおいてこのような箇所は例外的。なお、ホメロスで「祖(おや)」という意味である「ゲネシス」が、アリストテレスでは、そういう意味になっていない(ここでは文脈を考えて「ゲネシス」を「生じるもの」と訳した)。

116) 上述二神の娘の名。

117) 同第二歌七五行目「誓いの河ステュクス」、第一四歌二七一行目「犯すべからざるステュクス河の水にかけて誓っていただきたい」、第一五歌三七～三八行目「至福なる神々には最も厳しく最も怖るべき誓いなる、流れ落ちるステュクス水」を参照。

118) サモス島出身で、前五世紀後半、ペリクレス時代の折衷家・自然学者。タレスと同様に「水」を原理としたと言われる。ヒッポンの「証言」四 (DK) に、「タレス……そして無神論者でもあったと思われているヒッポンは、感

加える価値ありとする人などいないと思われるからで、その理由は彼の考えが安直だからだ¹¹⁹⁾。他方で、アナクシメネス¹²⁰⁾とディオゲネス¹²¹⁾は「空気（アーエール）」を「水（ヒュドール）」よりも先のものであり、単純物体のうちで最も始原であるものだとしている。メタポンティオンの人ヒッパソス¹²²⁾とエベソスの人ヘラクレイトス¹²³⁾は「火（ピュール）」をそうだと¹²⁴⁾、また、エンペドクレス¹²⁵⁾は四つの単純物体を、すなわち上述の三つに、さらに四つ目のものとして「土（ゲー）」を加えて、そうだと（つまり、それら四つの単純物体は常にとどまりつづけており¹²⁶⁾ [984a10] 生成はしないのだが、ただし、それらが一つのものへと合わさったり一つのものから分かれ出たりするので、多くなったり少なくなったりすることはあると¹²⁷⁾）している。しかし、クラゾメナイの人アナクサゴラス¹²⁸⁾は、時期こそエンペドクレスに先んじてはいるものの、著作の様々な内容の点では彼よりも後に置かれてしかるべき人なのであって¹²⁹⁾、始原は数限りなく存在すると主張している。アナクサゴラスの主張では、ほとんどすべての「同質部分体¹³⁰⁾」は、ちょうど水や火のようであって、

覚的諸事象から導いた結論として、始原は水だと語った」（岩波版に準拠。表記を一部変更）とある。

- 119) 『魂について』第一巻第二章四〇五b二以下でもヒッポンの考察が「粗雑」だとされており、アリストテレスのヒッポン評価は概して低い。ただ、「言及に値しない」と言いつつ言及しているのは少し腑に落ちない。アリストテレスがタレスに言及する際の言葉遣いをもう一度見直すと、伝聞（「～と言われている」）や推測（「たぶん～であろう」など）ばかりである。おそらくここで展開される「哲学史」ないし「学説誌」には先行業績があったのである。先に訳注で触れたプラトンの『クラテュロス』や『ソピステス』も重要なのだが、エリス出身で前五世紀後半のソフィストであるヒッピアスの学説誌にはヒッポンが登場していたと推定されており、アリストテレスはヒッピアスを批判する意味で「ヒッポンは言及に値しない」と言ったと解されている。
- 120) 前六世紀頃活躍した。ミレトス学派の完成者。「空気」を始原とし、その「濃縮化」と「希薄化」でその他のものを説明した。
- 121) アポロニアの人ディオゲネスのこと。前五世紀の折衷家。彼が考えを借りた思想家には、アナクシメネスだけではなく、エンペドクレス、アナクサゴラス、レウキッポスもいる。
- 122) ピュタゴラス学派に属し、おそらくヘラクレイトスよりいくぶん後の人。ピュタゴラス学派の要素とヘラクレイトス主義の要素を融合させ自分の体系を作った。
- 123) エベソス王家の出で、前六世紀の人。短く難解だが現代に至るまで人をひきつけてやまない格言風の「断片」が百以上残っている。
- 124) ヘラクレイトスの「火」は、現在ではこのようにタレスの「水」のような特定の始原とは解されていない。
- 125) シケリア島のアクラガスの人で、前五世紀頃に活躍した。火・水・土・空気の四つを「根（リゾーマタ）」と呼ばれる始原として設定し、それらを集めたり分離させたりする原理を「愛」と「争い」だと主張した。叙事詩の形式で書かれた作品の「断片」が一五〇ほど残っている。
- 126) 「とどまりつづける」の原語は「ディアメネイン」。先の「ヒュボメネイン」と「メネイン（とどまる）」という部分が共通している（「ディア」は持続性や一貫性を表すので「～つづける」と訳した）。
- 127) 「[実際に感覚されるものの数が] 多くなったり少なくなったり」ということ。
- 128) 前五世紀頃の人で、アテナイに住みついた最初の知恵の探求者。有名な政治家ペリクレスの師であり友であった。本章末尾で触れられる世界の原理としての「ヌース（理性）」の説で知られる。「断片」が二〇ほど残っている。
- 129) 素朴に直訳すれば「アナクサゴラスは『年齢（ヘーリキアー）』の点では彼[エンペドクレス]よりも前の人である[先に生まれた]が、作品の点では[著作を執筆したのは]彼よりも後の人だ」となるが、そのように解さなかった理由については、「Met.A.3 補注 b 九八四 a ——～一三におけるアナクサゴラスとエンペドクレス」を参照。
- 130) 原語「ホモイオメレー」は、古代に彼の思想が語られる際しばしば用いられる。詳しくは、「Met.A.3 補注 c アナクサゴラスと『ホモイオメレー』」を見よ。

生成したり消失したりするといっても、合わさったり分かれたりするだけのことであり、これ以外の仕方では生成も消失もせずに永遠にとどまりつづけるからである¹³¹⁾。

[984a16] それで、以上からすると、「素材」の種類に入ると言われた原因が唯一の原因だと勘違いする人が出てくるかもしれない。しかし、人びとが以上のような前進をなしたとき、事柄そのものが彼らに道を切り開き、次のようなことを探求するよう強いたのである¹³²⁾。すなわち、いくら[984a20] すべての消滅や生成が一つの何か¹³³⁾あるいはより多くのそれらに基づくのだとしても、それが現実に起こるのは何ゆえになのか、つまりそれを引き起こす原因となるものは何なのか。なぜなら、少なくとも「根底に置かれるもの」それ自体が自分自身を変化させることはないからだ。私が言っているのは、たとえば、材木も青銅も、それらの各々が変化する¹³⁴⁾ことの原因となるものではなく、また材木が寝椅子を制作することも、青銅が銅像を制作することもないのであって、何かそれらとは別のものがそれらの変化の原因となるものだということである。

[984a25] だが、それを探求することは「別の始原」を探求することであり、それは私たちが主張するであろうように、「動が由来する始原」のことである。それで、ずっと昔に以上のような研究に着手し「根底に置かれるもの」は一つであると主張している人たち¹³⁵⁾は決して自分たちの説に懸念をいだくことはなかったが、[984a30] 一つであると言う人たちのうち少なくとも何人か¹³⁶⁾は、まるでその探求に敗北してしまったかのように、こう主張する。すなわち、「一なるもの」つまり「自然全体」は動かされ得ないのであって、動のこの否定は生成や消滅に関してだけではなく（実際これは非常に古くからある見解でこの点では彼らがみな一致した¹³⁷⁾）、その他の[984b] あらゆる種類の変化¹³⁸⁾に関してもそうなのだ（まさにこちらがこれらの何人かに固有な見解なのだ）。

それで一方で、世界万有¹³⁹⁾がただ「一なるもの」である¹⁴⁰⁾と主張する人たちのうち、上述のような原因¹⁴¹⁾を熟知するに至った者は誰一人としてもいなかった。ただしおそらくパルメニデス¹⁴²⁾は事情が異なる。それはつまり彼が、原因は一つであるとするのみならず、或る意味では、二つで

131) 「断片一七」(DK) に、「いかなる事物も生成することもなければ消失することもないのであり、現に存在している諸事物が元になって、一つに混合したり分解したりしている」とある。

132) 後の九八四b一〇で「ちょうど私たちが述べたように」と言及されている箇所であり、「事物・物事・事柄（プラグマ）そのもの」が「強い（アナンカゼイン）」あるいは「[存在するものの] 真相・真実・真理（アレータイア）そのもの」（九八三b三、九八四b一〇）によって「強いられる（アナンカゼスタイ）」というように、同じ動詞がここでも後でも共通して登場している。詳しくは、「Met.A.3 補注 d 『事柄・真理に強いられて』という言いまわしについて」を参照。

133) 「素材」のこと。

134) 「[寝椅子や銅像に] 変化する」ということ。

135) タレス、アナクシメネス、ヘラクレイトスなど。

136) エレア学派の人たち。

137) この丸カッコと次の丸カッコ内の文は、底本にしたがわず念のために残すことにした。

138) 場所の変化、量の変化、質の変化など。

139) 三行前（九八四a三一）の「自然全体」の言い換えと解した。

140) 世界には「多」はないということ。

141) 始動因のこと。

142) 前六世紀頃に活躍した、南イタリアのエレアの人（ここから彼の学派は「エレア学派」と呼ばれる）。存在一元論と呼ばれる独自の思想を叙事詩の形式で表現した。

あるともしている¹⁴³⁾限りにおいてである。それで他方、原因を一つよりも多くした人たち¹⁴⁴⁾にとっては、たとえば「熱いものと冷たいもの」あるいは「火と土」を原因にした人たちにとってのように、上述の原因を語ることが以上の人たちよりもいっそう可能であるわけだ。というのは、ものを「上方へ」動かす力のあるものとして火はその自然本性をもつとし、水や土やそういったものは反対の仕方自然本性をもつ¹⁴⁵⁾としているからだ¹⁴⁶⁾。

さて、それらの人たちや以上のような始原¹⁴⁷⁾が登場した後で、これらでは様々な存在からなる自然¹⁴⁸⁾を生み出すには十分ではなかったという理由で、ちょうど先にも述べられたように¹⁴⁹⁾、またしても [984b10] 真実そのものによって強いられて、「後につづく始原」を人びとは探求した¹⁵⁰⁾。つまり、様々な存在のうちには、善く美しい状態にあるものもあれば、善く美しくなるものもあるが、おそらく、こういったことの原因であるものとしては、火も土もそのようなたぐいの他のものも、もっともらしさがなく、上記の人たちがそう思っていたということも同様にもっともらしがない。かといってまた、「ひとりでにそうなる」とか「たまたまそうなる」とかいうこと¹⁵¹⁾にそれだけの事柄を委ねてしまうことも、うまくいきそうになかった。それで、「知性(ヌース)」が、ちょうど動物に内在するように自然にも内在するのであって、世界秩序¹⁵²⁾にもあらゆる配置にもその原因となっているのだと或る人が述べたとき、彼以前の人たちの話しぶりが行き当たりばったりであったことと比べると、あたかも、しらふの人が現れたかのようにであった¹⁵³⁾。それで、明らかにアナクサゴラスが、これらの説明に触れたということを私たちは知っている。しかし、彼よりも前にこれらのことを述べたとされるだけの理由が、[984b20] クラゾメナイの人ヘルモティモスにはあ

143) 「或る意味では、二つであるともしている」はパルメニデスの詩の第二部(「断片」八(DK)の五〇行以下)の「思惑の道」への言及であり、本巻第五章九八六b三一以下において彼が「原因を二つ立てた」ことについて述べられている。

144) この人たちにパルメニデス(詩の第二部「思惑の道」の彼)を含めるか(アレクサンドロスと Bonitz)、あるいはそうではなくエンペドクレスのことか(Ross)で、意見が分かれている。詳しくは、「Met.A.3 補注 e 984b5 の『原因を一つよりも多くした人たち』について」を参照。

145) 火と反対の方向(下方)へ動かす力のあるものであるということ。

146) 始動因の役割が「素材」に割り振られているということ。

147) 素材因と素材的な始動因(始動因のはたらきを「素材」に割り当てたもの)のこと。

148) この箇所「ピュシス」は、Bonitz 1870 で、'rerum universitas'(全世界)の項目に入れられている。実際、九八四b二の「世界」という意味の「ト・バーン」の言い換えであるので、この見解にしたがう(「自然界全体」の意味になる)。

149) 訳注一三一を見よ。

150) 「[[それらの] 後につづく始原」を「純粋な始動因」と解することについて、詳しくは、「Met.A.3 補注 f 984b11 における「[[それらの] 後につづく始原(ヘー・エコメネー・アルケー)」という言葉は何を指すのかについて」を見よ。

151) 「ひとりでにそうなる(アウトマトン)」と「たまたまそうなる(テューケー)」については、『自然学』第二巻第四章から第六章、本書Z(第七)巻第七章と第九章、K(第一一)巻第八章を参照。

152) 原語は「コスモス」で、通常アリストテレスでは「宇宙」「世界」の意味だが、アナクサゴラスとの関係では「秩序」の意味にもなりうる。両方の意味を出せるように「世界秩序」と意識した。

153) プラトン『パイドン』九七Eが思い起こされる。

るのだ¹⁵⁴⁾。

さてこうして、以上のように判断している人たちは、「美しくあることの原因¹⁵⁵⁾」が様々な存在の始原であると定めると同時に、また「それらの存在に動が属する場合に基礎となるような原因¹⁵⁶⁾」がそうであるともしたわけである。（訳文終わり）

・Met.A 補注

Met.A.1 補注 a 聴覚、記憶、学習（教え込まれるということ）

ここで、「たとえ聴覚を欠いていても、その他の感覚をもち、しかも記憶が生じるのなら、それは『学習している』のではないか？ 何かを見ただけでも、その「見られた何か」を記憶できているなら、それは『学習した』と言えないか？」という疑問が出るかもしれない。この疑問は重要な点をついている。『動物誌』第八（第九）巻第一章（六〇八 a 一七～二一）によると、「聴覚にあずかる動物」、しかも、単に「音（プソポス）」の違いだけでなく、「何かを有意味に示す印」（セーメイオン）——『魂について』第二巻第八章（四二〇 b 三二～三三）の言い方を使えば「何かを有意味に示す何らかの『音』」としての「声（ポーネー）」——の違いも感覚できる動物が、何らかの「学習（マテーシス）」もするし「教育（ディダスカリアー）」もする——これらは動物相互の場合も人間からの場合もある——からである。この「学習」は「独学」なのではない。音声がいられ他者から「教え込まれること」を前提とした「学習」なのである。『形而上学』のこの箇所「学ぶ（マンタネイン）」が“to be taught”の意味であることは、すでに Ross が指摘しており、訳者たちは彼にしたがっている。『魂について』第三巻第四章（四二九 b 九）で「学習する」と「発見する」が対比的に登場し、「発見」の能動性との対比で「学習」に受動性のニュアンスが与えられていることも一つの証拠とされている。

さてそれゆえ、『形而上学』のこの箇所でも、このような意味の「マンタネイン」が前提されていると考えると納得がいくであろう。「教え込まれる」と対になる「教える（ディダスケイン）」という言葉は九八一 b 七と九で登場している。

また、聴覚に問題がある場合に学習が不可能になるというわけではなく、視覚だけの学習も可能だが聴覚を使える学習よりは困難になるとアリストテレスは考えている。『自然学小論集』の第一論考「感覚と感覚されるものについて」第一章（四三七 a 三～一七）を参照。

具体的な動物の「学習」や「利口さ」を論じている箇所としては、多くの種類の声をもち互いに学習をしているように思われるほど意思の疎通に「舌」を使っている「鳥」を論じた『動物部分論』第二巻第一七章や、「鶴」が「利口なもの」であることを「声」との関係で論じた『動物誌』第八（第九）巻第一〇章がある。

154) 伝説上の人物。彼の魂は眠っているとき体を離れたという話もあり、これはアナクサゴラスの知性が物体から独立して存在することの類比になるとされてきた (Ross)。しかし、ここでの話題は知性の独立性ではなく内在性であり、むしろアリストテレスの初期著作『プロトレプティコス』の「断片」一〇 c (Ross) の次の箇所の方が参考になろう。すなわち、「『知性はわれわれの内なる神である』（これがヘルモティモスの言葉であれ、アナクサゴラスの言葉であれ）」（國方訳）。

155) 純粹な始動因 (Ross)。この解釈について詳しくは、「Met.A.3 補注 f」を参照。

156) 始動因のはたらきを割り当てられた「素材」、すなわち純粹ではない始動因 (Ross)。この解釈についても、「Met.A.3 補注 f」を参照。なお、「基礎となる」は「ホテン（そこから・それに基づいて）」の意訳。

Met.A.1 補注 b 表象と記憶について

まず、『自然学小論集』の「記憶と想起について」第一章末尾(四五―a―四～一六)によれば、「記憶(ムネーメー)」とは、「表象内容(パンタスマ)」を、表象内容が関わっている事物の「像(エイコーン)」として「もちつづけている状態(ヘクシス)」である。つまり、記憶が成立している動物には表象内容が、したがってそれを生み出す「表象のはたらき(パンタシアー)」が必ず属していると言える。次に四四九b二八～三〇では時間を感覚するものだけが記憶をすることも言われているが、それに対して表象のはたらきは時間の感覚がなくても成立する。ゆえに表象のはたらきはあっても記憶は成立していないというケースがある。最後に、感覚と表象のはたらきの関係を正確に述べることはむずかしいが、先行する部分で「感覚と記憶」の関係が論じられていたのであるから、その流れを受けて、ここでは、感覚と密接に関係するものとして表象のはたらきを押さえることはできよう。さてしかし、感覚から記憶が生じない動物と記憶が生じる動物がいると先に言われていたのであるから、ここで従来のように「人間以外の動物は、表象のはたらきと(ギリシア語の小辞「カイ」)記憶によって生きる」というように「カイ」を連言的に「且つ」という意味で訳すと問題が生じてしまう。「人間以外の動物」には記憶によって生きるのではないものがあるからである。そこで、この箇所の「カイ」を、選言的に「あるいは(ギリシア語の「エー」)」の意味で、つまりギリシア語の「エー」の代わりに使われたもの(Denniston, 1934/1950, 192のI(8): “Linking alternatives, instead of ἢ”)と解し、「人間以外の動物は、表象のはたらきや記憶によって生きる」と訳した。トマス(L.I. I.I, n.14)も同様な解釈をしており、「『表象のはたらきによって』は不完全な動物の場合であり、『記憶によって』は完全な動物の場合である」と述べ、「後者は表象のはたらきも有する」としている。

Met.A.1 補注 c 980b27の「ミークロン」

九八〇b二七の「ミークロン」をポジティブに「少ない(少しある)」と訳す根拠としては、直後の「人間たちからなる類は、技術や様々な推論によっても生きている」と言われている文の「も(b二七の最後の「カイ」)が挙げられる。経験によって生きている動物が——何らかの意味で、そして、少しではあるにせよ——いると先に言われていなければ、この「も」に意味が出ないであろう。

次に、ネガティブに「少しもない」と訳す根拠は、しかし、さらに次の文で「さて、人間たちには、記憶から経験が生じている」と言われていることが挙げられる。この文では人間以外の動物では記憶から経験が生じないかのように語られているからである。

アレクサンドロスは、二つ目の文を重視して、経験が人間に固有であることをアリストテレスが述べているという方向性を持った(Alex., 4, 20-21-20)。しかし、直後とその次の二つの文が、対立する二つの理解の根拠になっているからには、何らかの意味でどちらも成り立つと言わざるを得ないだろう。

Rossは、基本的にポジティブな立場を採るが、人間以外の動物の場合は記憶から経験が生じることはoccasionallyで、人間の場合はconstantlyだという、言わば頻度の対比をして、人間以外の動物の経験と人間の経験の違いを押さえ、ネガティブな面も確保をしている。Cambianoもポジティブな路線を採る一方で、人間以外の動物の経験は人間の経験よりも程度が低いとして、言わば経験の質の対比をして両者の経験の違いを押さえ、やはりネガティブな面も確保をしている。

拙訳では、このように両立的に理解する立場に賛成するが、直後の文の「も」との関係で、ポジティブに少しあるという意味で「少ない」と訳すことにした。そして、直後の文の「技術」や「推

論』で——アレクサンドロスが「思慮（プロネーシス）」を読み取っている（Alex., 4, 19-20）ように——人間の「理性（ロゴス）」が含意されていると解し、二番目の文の「さて、人間たちには、記憶から経験が生じている」と言われている場合には、理性のはたらきが何らかの仕方に関連しているという解釈を採った（Rossも、後の981a6の「技術が生じるのは、経験に属する多くの思考内容から、普遍的な一つの判断が、複数の類似物について、生じることができたときだ」という言葉の「経験に属する多くの思考内容」という部分から、経験成立における理性の要因を読み取っている）。

Met.A.1 補注 d 記憶・（想起・思案）・推論

『記憶と想起について』第二章に、「他の動物の多くは『記憶している』ということにあずかっているものの、人間を除いて、現在知られている動物のうち、言わば何ものも『想起する』ことにあずかっていない。『想起する』ということは或る種の『推論』のようなものであるのが、その理由である。……それは、『思案する能力』が自然本性的に属するものにしか起こらない。『思案する』ということこそ、或る種の『推論』であるから」とある（四五三 a 七～一四）。

「思案」は、目的に合った手段を見つけて行為へと結びつける「実践的推論」を作る思考のはたらき。「想起」は、単に思い出すことなのではない。四五二 a 一四～一六の例を使えば、思い出せるのは「牛乳」のことだけという状況で、「いつの季節のことだったか？」という、すぐには思い出せないことを、「牛乳→白さ→霧→湿気→晩秋（ギリシアの晩秋は雨が多く湿気ている）」のように「中間のもの」を発見しつつ、様々な記憶を結びつけていき、「探求」する思考のはたらきなので、「或る種の『推論』のようなもの」と言われている。

「記憶」や「教示」は他の動物もあずかることがあるが、思案する能力をもつ人間だけが「想起」できると、『動物誌』第一巻第一章でも言われている（四八八 b 二四～二六）。

Met.A.1 補注 e エジプトにおける数学の発生の仕方の記述の相違

Cambiano 2012, 36 は、むしろここでアリストテレスが、ヘロドトスに劣らず、当時論敵だったイソクラテスの弁論『ブシリス』第二一～二三節を利用しているのではないかと推測する。そして、Cambiano が導き出した興味深い結論は、手段的でない知識を追求するためには歴史上エジプトで最初に達成されたような「一定の社会的環境」が整うこと、つまり一定の集団が「スコラゼイン」することを（王ないし社会から）許されることが必要であったという考えを、アリストテレスとイソクラテスは共有しているというものである。

まず、ヘロドトスの『歴史』第二巻一〇九の記述は次の通り。

「一〇九 祭司たちの語るところでは、この王〔セソストリス〕はエジプト人ひとりひとりに同面積の四角形の土地を与えて、国土を全エジプト人に分配し、これによって毎年年貢を納める義務を課し、国の財源を確保したという。川の出水によって所有地の一部を失う者があった場合は、当人が王の許へ出頭して、そのことを報告することになっていた。すると王は検証のために人を遣わして、土地の減少分を測量させ、爾後は始め査定された納税率で（残余の土地について）年貢を納めさせるようにしたのである。私〔ヘロドトス〕の思うには、幾何学はその理由から発明され、後にギリシアへ招来されたものであろう。現にギリシア人は日時計、指時計、また一日の十二分法をバビロン人から学んでいるのである。」（岩波文庫・松平訳ヘロドトス『歴史』（上）、二〇〇七年改版発行版、二六〇～

二六一頁、一部訳語を変更させていただいた、強調の傍点は引用者)

ところで、Cambiano は、ここでアリストテレスはヘロドトスの『歴史』第二巻の記述だけではなくイソクラテスの弁論『ブシリス』二一～二三の記述も使っていると主張する。なぜなら、アリストテレスのここでの議論にとってポイントとなる「数学的な技術を聖職者たちが発見した」という重要なことがヘロドトスの記述には登場していないからである（実際、「発見された」と受け身で書かれているが、発見主体は書かれていない。「神官たち」という言葉は、たしかにここに見られるけれども、数学（幾何学）の発見者としてではなく、ヘロドトスへの情報提供者としてである）。次に、イソクラテス『ブシリス』二一～二三を引用する。

「二一 さらに知恵の配慮ということについても、ブシリスがその元祖であると認めてよい。彼は神官階級のために、供儀から得られる収入によって生活の安定を、浄化の儀式を法制化することにより節制を、また戦争の危険やその他の仕事から免除することによって閑暇（スコレー）を準備してやったのである。

二二 神官たちはこういった条件に恵まれて生活しながら、身体のために、医術の助けを発見した。これは劇薬を用いるものではなく、毎日の食事のように安全な、しかも極めて健康的な薬物による療法であって、エジプト人がどこの人びとよりも健康で長寿であることは広く知られるに至っている。他方、魂のためには、哲学の修練を世に出し、これによって法律の制定と同時にまた存在の探求を可能にしたのである。

二三 またブシリスは、年長の人びとを重要な政務に任命する一方で、年若の者には、快楽を打ち棄てて、天文学、計算、幾何学に従事することを説き勧めた。これらの学問のはたらきについては諸説あり、或る人びとはいくつかの分野での有用性を推奨し、また或る人びとは徳性に最も貢献するものであることを証明しようとしている」（小池訳、イソクラテス『弁論集2』、五四頁。多少表記を変更させていただいた。原語と強調は引用者）

イソクラテスのこのバージョンの場合、たしかに王によって神官たちに「スコレー」が「準備」される。だが、神官たちがそれによって「発明」したと言われているのは、「医術の助け」と「哲学の修練」であり、幾何学は神官たちの発明のなかに含まれていない。それは神官たちのうちの「年若の者」にとって「従事」することを「説得」されるものである。幾何学が神官たちによって「発明」されたとは残念ながら言えない。当時イソクラテスとアカデメイアとの間で論争があったと考えられているが、論敵の想定を一部利用しながら相手とは異なる結論を導き出してみせたなら、それは気が利いていて愉快ではある。しかし、ヘロドトスだけではなくイソクラテスの資料も使われた可能性があるということくらいしか言えないようだ。ただし、王ないし社会が神官たちに「スコレー」や「スコラゼイン」を「準備した」「許した」という点は、ヘロドトスではあまりはっきりしないのに対して、イソクラテスとアリストテレスでは明らかでありしかも共通している。ともかく『ブシリス』がここでアリストテレスの念頭にあるとすれば、王が神官たちに生活に必要なものを用意したことに対応する「そういったものすべての準備がすでに完了している」ことと、彼が（比較的若い）神官階級を数学に従事させたことに対応する「神官たちが集団としてスコラゼインを許される」ことが重要になろう。つまり、ここでのアリストテレスの議論を、実際の必要性から解放されることが、それ自体目的である技術や知識の発見に必要なのみ押さえることは不十分であって、それに従事する集団が言わば社会的に認められることが必要だということになるわけである。（『哲学

しててもいいですか』という本が出ざるを得ない状況では特に興味深い論点であろう。)

・Met.A.2 補注

Met.A.2 補注 a 九八二 a 九～一〇の「こまごました個別のこの知識をもつのではない」について一つ目は、アレクサンドロスが最初に挙げている解釈で、「個々の学や技術に関して『知者』である者の仕方ではない。実際、私たちは、この「個別の学や技術に関わった」仕方で知る者たちを『知恵ある者たち』ではなく、むしろ、彼らがこの仕方で語るそのことに関する『技や知を身につけた者たち』だと判断している」(Alex., 9, 31-10, 1) というものであり、二つ目は、アレクサンドロスが「さらに」と付け加えている解釈で、「さらに、先に述べられた仕方「共通で普遍的な仕方、包括的な仕方 (Alex., 9, 29-30)」以外で『すべての事物「万物」』の知識をもつことは不可能である」(10, 1-2) というものである。二つ目のものは、個別の物事の「知識[学問的知識]」をもつことは(その対象の普遍的で必然的な本性からして)不可能であるからという考えにつながるが、プラトンは『国家』第五巻四七六 D と、アリストテレスでは本書 B (第三) 巻第六章一〇〇三 a 一以下「もし、始原が、… [中略] …個別のものが存在するような仕方で存在するのならば、知識は存在しないことになるだろう」と相性がよい。すると、先に言われた「可能な仕方で」が、「個々のものの知識をもつ」という不可能な仕方のことではないのだとすれば、どのような仕方で可能なか問題となるが、後の「論点一」でその答えが語られる(アレクサンドロスの解釈はすでに紹介した)。なお、一般の人びとの判断の場合は、こまごました個別の事情をその人がいちいち知ってなくても「知恵ある者だ」という判断はくつがえされることがないことを意味しよう。

Met.A.2 補注 b 982a17 の「従属する知識」

九八二 a 一七 (および九八二 b 五) の「従属する(ヒュペーレトゥーサク動詞ヒュペーレテイン)」知識については、本書 B (第二) 巻第二章の次の箇所(九九六 b 八～一三)が参考になる。

[996b8] それで、先に[本書『形而上学』第一(A)巻第二章で]規定されたこと、すなわち、様々な知識のうちで「知恵」と呼ばれるべきものは何なのかについての規定に基づけば、… [中略] … [996b10] すなわち、「知恵」は、まず、[a] 支配や指導をする最高位のものである限り、そして他の知識はちょうど婢女(はしため)のように指図に逆らわないことこそが正しいのである限り、目的すなわち善の知識が「知恵」と同じ種類の知識である(その「ため」に他のものは存在するから)。

引用文の「婢女」の例からすると、この箇所の「ヒュペーレテイン」は「奉仕する」という訳も可能だが、「何を奉仕するのか」などの、類比的に重要な側面に引きずられた余計な思弁に陥る危険性がある(「知恵」とその他の理論学の場合に「指図に逆らわないとは具体的にどういうことか」と考えることも同様であろう)。

後の巻、特に、Γ (第四) 巻第三章一〇〇五 b 一～二の「自然学も一種の知恵ではあるが、第一の知恵ではない」や、E (第六) 巻第一章一〇二六 a 二七～三一の、自然学が「第一の知識(プロテアー・エピステーメー)」あるいは「知恵を愛し求める第一の活動(プロテアー・ピロソピアー)」を名乗ってよいか否かの議論に見られるような、研究対象に基づく学問上の上下位関係と類比的な、「自然全体の最高の善としての目的を認識している知識」と「それを認識していない知識」の上下関係——本巻第一章九八一 a 三〇以下の「制作物全体の目的を認識している親方」と「その目

的を認識しておらず部分部分を作るだけの職人」のような——だけを考える（つまり「指図に逆らわない」とはこの「全体に関わる目的」の認識に基づく上下関係だけを表すと考える）のが妥当であろう。

Met.A.2 補注 c 「ポリティーケー（政治学）」と「ソピアー（知恵）」の平行関係の適切性の問題について

Ross によれば、ここで、ソピアーは、支配に関わる知識として、まるで『ニコマコス倫理学』第一巻第二章における「ポリティーケー（政治学ないし政治術）」のように記述されており、そのことが問題を引き起こす。というのは、ソピアーは、真理の「見極め（テオーリアー）」それ自体を目的としており、ポリティーケーのように何か別のものに関わることはないはずだからである。そしてこの問題の焦点となるのが、訳注で取り上げた「各々のことが何を目的として『なされるべき（プラーク-テオン）』であるのかを認識している知識」という言葉なのである。これは、ポリティーケーにならびたりと合うだろう。しかし、ここでのソピアーは、「自然全体における最高の善」に関わるとされているのであって、自然の出来事の進行に「べき（ought）」はなく、それは「事実として（in fact）」目的へ向けて展開していくのみなのである。

さて、Ross は明言していないが、もしこの通りなら、アリストテレスは現代哲学で言う「自然主義的誤謬」を犯していることになり事態は深刻である。Ross の考えでは、このあたりの箇所は通念を述べているだけなので、思想のいくらかのゆるさが期待されうる。もちろん、「通念にすぎないので多少の齟齬があってもアリストテレス自身の考えではないからかまわない」という理屈は一応成り立つ。

しかしこれに対して Broadie は、「各々（ヘカストン）」は、この議論が最後で「自然全体における最高の善」に至るからには、人間のなすこと・行為の「各々」ではなく、「自然の根本存在・自然的実体（natural substance）」の「各々」と解すべきで、「プラーク-テオン」の「プラーク-（なされる-）」も、狭い意味の「行為」に限定するのではなく、広くそのような自然存在の「ふるまい（behaviour）」を指すのだと主張する。そして、このように解すれば、「この箇所では本来性格の異なる『ポリティーケー（政治学）』と『ソピアー（知恵）』が不適切な仕方でも平行して論じられてしまっている」という Ross の指摘にうまく対処できるとする。

たしかに、人間以外の動物、植物、さらには天体にも、通常は「行為・実践」と訳される「プラークシス」という言葉が用いられることがある（これについては「西洋古典叢書」の拙訳『動物部分論・動物運動論・動物進行論』八五頁註（8）を参照。私は生物学著作では「プラークシス」をもっぱら「活動形式」と訳した）。ただし、「行為・実践」の主体となるためには、あくまでも何らかの意味で「生きている」と見なされること——天体は「生きている」と当時は見なされていた——は必要ではないかと思われる。つまり、全くの無生物である物体にまで「プラークシス」を当てはめるのは無理であろう。

この問題は、ここではこれ以上論じることができないので、形而上学と倫理学の関係の問題としてオープンなままにしておきたい（拙著『アリストテレスの形而上学』第三部がこの問題を幸福論の角度から論じているので読んでいただければ幸いである）。

Met.A.2 補注 d 九八三 a—四の「タウマタ」と「アウトマタ」

まず、前章と本章でたびたび下敷きとされているプラトンの著作を確認すると、よく知られてい

るように、『国家』第七巻冒頭、有名な「洞窟の比喩」が説明され始める五一四B五に「人形遣いたち（タウマトポイオイ、直訳は「驚かせ感銘を与えることをする人たち」あるいは「作る人たち」）が、そしてB六に彼らが使う「タ・タウマタ（操り人形）」が登場する。

次に、「タ・アウトマタ（直訳すれば「みずから／自動的に動くもの」）」は、『動物運動論』第七章七〇一b一以下の「さて、自動人形（タ・アウトマタ）が動くのは、小さな運動が生じたからであって、つまり、巻いた糸がほどけて、木製の部品が互いにぶつかり合っている」（拙訳）という箇所と関係づけられることが多い。

またアリストテレスには他に、「タ・アウトマタ」の後に「タ・タウマタ」の置かれる表現が、『動物発生論』第二巻第一章七三四b一〇、第二巻第五章七四一b八～九にある。これらは、「タウマタ」を形容詞的に「タ・アウトマタ」にかけて、「驚異の自動人形」とか「見世物の自動人形」とかと訳されている。

ただし、『形而上学』のこの箇所では、「トーン・タウマトーン」が「タ・アウトマタ」の後でなく前に置かれている理由が分かりづらい。また、ここに「まだその仕組みを理解していない人たちにとっては」という言葉が添えられている理由も理解しづらい。

前者の問題については、「トーン・タウマトーン」と（「たとえば」と訳することになっている）「カタペル（kathaper）」との間に、「について（peri）」という前置詞を補い、これに「トーン・タウマトーン」を支配させるという提案が現在では定着しており、Ross版でも底本でも採用されている。

しかし、この場合でも後者の問題は残るので、ここにある「まだその仕組みを理解していない人たちにとっては」を移動させる案が出ている。だが、底本はその移動案を採っておらず、私も次の「Met.A.2 補注 e」で挙げた理由からやはり移動案を拒否している。他に、「トーン・タウマトーン」を通常の意味に解して「まだその仕組みを理解していない人たちにとっては」を「驚かせ感銘を与えるもの」にかける案（Schwegler 1846-48 など）も出されたことがあるが、それらの言葉同士が原文では少し離れていることもあり、賛成する人はほとんど出なかった。

そこで、後者の問題も解決できる案として次のようなものを私は考えた。すなわち、ここでは、『国家』第七巻の「洞窟の比喩」がアリストテレスの念頭に（そして当然アカデメイアの仲間の念頭にも）あり、その「比喩」そのままではないにしても、下敷きにされている、正確に言えば転用されていると解する。「まだその仕組みを理解していない人たち」は、洞窟の奥しか見たことがなく真実を知らない「囚人たち」に相当する。「タ・タウマタ」は、『国家』の用例の通り、「操り人形」を意味する。そして、操り人形が、操られているのではなく「みずから動いているもの」だと、「囚人」に相当する「まだその仕組みを理解していない人たち」には思われてしまう。ここでは文脈上、操られているという事情を彼らは知らないで、「人形がみずから動いている！」と驚く、ということになる。この解釈の特徴は、「タ・アウトマタ」を、従来のように、動力源となる部分や駆動部を内蔵した言わば「機械仕掛けの人形」とは全然解していないことである。ポイントは、ただ、「みずから動く」という字義通りのことだけである（したがって、この箇所の「タ・アウトマタ」は、『動物運動論』や『動物発生論』の「自動人形」のことではない）。

その驚きは理解不足によるものだが、「昼夜の長さが変わっていき、その変化に折り返し点があること（夏至や冬至の存在）」や「正方形の対角線がその辺と同じ単位で測りきれないこと（共約不可能性）」について驚くのも、同じ理解不足のはずである。しかしそうすると、「まだその仕組みを理解していない人たち」がこの「人形」例の近くの位置にあることが問題になるかもしれない。「夏至や冬至」などもそのような人たちにとってははずだからである。だがこれについては、「囚人」

に相当する「まだその仕組みを理解していない人たちが」先述の「比喩」（したがってここでの人形の例）と関係が深いことに加えて、後者の「夏至や冬至」などには、「人形」の場合のような「誤解」に相当する内容が語られないことも関係があろう。

なお、以上の解釈は、『形而上学』A（第一）巻の藤澤訳「操り人形がひとりで動くこととか」と同じ方向性をもっていると私は思う。記して感謝したい。

Met.A.2 補注 e 九八三 a 一六の「すべての人に」について

「後者の場合に『驚いて感銘を受けるのも当然』だとすべての人に思われるのは」の「すべての人に」が広すぎるように見えるかもしれない。なぜなら、以下の九八三 a 二〇で登場する「幾何学を身につけた人」は後者のことに驚くはずはなかろうからである。

しかし、「一方で」から始まるここでの議論（九八三 a 一三～一七）では、問題の事柄が起こる仕組みをまだ誰も——つまり文字通りに「すべての人が」——理解していなかったときのことが、つまり知識獲得の活動が開始されたときのことが述べられていると考えられる。その仕組みの理解ができるようになって探求が終了する段階の記述は、九八三 a 一七の「他方で」から始まる「その仕組みの探求過程が終わるべきなのは」以下である。

従来は、先の「その仕組みをまだ理解していない人」という言葉をここへ移動させて「後者の場合に〈その仕組み〔ここでは「理由」と訳す方がいいだろう〕をまだ理解していないどの人にも）『驚いて感銘を受けるのも当然』だと思われるのは」とする巧妙な案（Bonitz, Jaeger, Ross など）が採られてきたのであり、写本のままの位置を保持する底本の読み方は少数派である。だが以上のような文脈上の事情のゆえに、有力写本の読み方に反してまでその言葉を移動させる必要性はないと思われる。

・Met.A.3 補注

Met.A.3 補注 a 過去の愛知者に言及する時制について

現在形には過去の出来事を現在形として語る「歴史的現在（*praesens historicum*）」と呼ばれる用法があり、そしてこれには「目前のことのよう（*dramaticum*）」に語る場合と「記録的（*annalisticum*）」に語る場合があって、ここでの現在形が歴史的現在であれば、おそらく後者であろう（田中・松平『ギリシア語文法』第三〇〇節を参照）。

また、現在形には一般的な現在ないし法則的な事柄を述べる用法もあり、「明らかに彼らも何らかの始原や原因のことを語っている」は、こちらの用法のようにも見える（前掲の田中・松平、第二九五節参照）。

一般化がアリストテレスの解釈の枠内で行われるとすれば、過去の愛知者に関する現在形の発言はアリストテレスの解釈の色彩が濃い一般的な判断になりがちで、過去形の発言は過去に関する記録の意味合いが強い、あるいは特殊的・個別的な論点が挙げられやすいと、ひとまずは言えるかもしれない。

Met.A.3 補注 b 九八四 a 一一～一三におけるアナクサゴラスとエンペドクレス

しかし、前半の部分だけをとってみても、おそらく事実と反しており（エンペドクレスの方がアナクサゴラスよりも先に生まれたと考えられるから）、後半の解釈は錯綜している。カーク／レイヴン／スコフィールドのまとめでは解釈は三つで、「アナクサゴラスがその書物を著したのがエン

ペドクレス「より後」だ（比較的明瞭な解釈）というのか、それとも彼の方がその見解の点で「より現代的」だ（あるいは、アレクサンドロスの解釈によれば、「より劣っている」のでさえある）（邦訳版四四六頁に準拠した）というものがある。解釈の決め手は、この文が、エンペドクレスよりも或る意味で「先」のアナクサゴラスを「後」に論じることの理由として機能するかどうかであるが、以上に対して、Mansfeld 2011 は次のように主張する。すなわち、エンペドクレスやアナクサゴラスの「ヘーリキアー」とは、「年齢」のことではなく、作品の執筆とそれが公に入手可能になった「時期」のことであり、アテナイに滞在していたアナクサゴラスの作品の方が、アテナイ人たちにとっては、エンペドクレスの作品の前に（つまり「より先に」）入手可能になったと推測する。つまり、エンペドクレスの作品がアテナイで入手できるようになったのは最近のこと、すなわち「後」だが、それよりも「先」に入手可能になったアナクサゴラスの作品の方がプラトンのものである（本巻第八章九八九 a 三〇～b 二一とりわけ b 一六～一八参照）という意味では「後」の——アリストテレスの学説誌の最後の（つまり彼にとって「現代的な」）地点にあるプラトンの理論の近くの——ものだという意味（Mansfeld はこの点では先の二番目の解釈と同じ）になるのである。ここでは総合的に判断して、Mansfeld の解釈の線で意識した。

Met.A.3 補注 c アナクサゴラスと「ホモイオメレー」

これは、おそらくアリストテレスによって作られた用語であり、これがアナクサゴラスに帰せられたのは、学説史家たちの誤解が原因だとされている。『動物部分論』第二巻第一章および第二章によれば、「同質部分」とは、全体と同じ名を部分をもつ構成体（水などの単純物体そのものではなく、それから構成された、生物の体の部分）のことで、たとえば肉の部分はやはり「肉」と呼ばれるから肉は「同質部分」であるが、しかし顔の部分は「顔」ではなく「鼻」や「口」などと呼ばれるから顔は「同質部分」ではなく「異質部分」（肉や骨などの「同質部分」から構成された部分）だとされる。「ホモイオメレー」に対応するアナクサゴラス自身の言葉は、「断片四」（DK）によれば、「種子（スペルマタ）」である。「種子」とそれから生長するものとは同じ名をもつはずであるから、アリストテレスによって「種子」が類比的に「ホモイオメレー」と呼ばれたのであろう（それゆえ「同質部分体」と訳された）。なお、「すべてのホモイオメレー」に「ほとんど（スケドン）」と限定の言葉が注意深く付け加えられているのは、アナクサゴラスが「種子」に含めず「種子の混合体」として扱ったもの、すなわちエンペドクレスの四元素を、ここでアリストテレスが「ホモイオメレー」に含めているからだと考えられる。「水や火」は、アナクサゴラスの「種子」の例にならない。このことに関しては、『天について』第三巻第三章三〇二 a 二八以下の、エンペドクレスとアナクサゴラスが対比的に論じられている箇所、アナクサゴラスによれば「空気や火」は「種子の混合物」だと説明されている。

Met.A.3 補注 d 「事柄・真理に強いられて」という言いまわしについて

類似の言いまわしは他に二箇所存在し、まず、『自然学』において——『形而上学』と同じように——歴史的反省から始原考察の手がかりを得ようとする言わば「小哲学史」とも言える第一巻第二章～第六章のなかにあり、「彼ら〔初期の愛知者たち〕すべてが基本要素（ストイケイア）、あるいは彼らの言うところの元のもの（アルカイ）として、対立相反的なものを語っている。もっとも、しかるべき論拠（ロゴス）を示してのことではなく、言わば（ホースペル）真理そのものによってそう強いられたためであった」（第五章一八八 b 二七～三〇、内山訳に準拠。一部表記と訳語を変更）

と述べられている。たとえであることを示す「ホースペル（直訳は「～かのよう）」は、「強制（アナンケー）」という言葉にどうしてもまつわりつく——現代的に言えば——「歴史決定論」的な色合いを弱めるはたらきをしており興味深い。二つ目の登場例は『動物部分論』第一巻第一章六四二a一九以下と二六以下である。すなわち、前者は「エンペドクレスさえ、真実そのものに導かれて（アゴメノス）、始原としての自然本性に何度か行き当たったようで、本質存在であり自然本性であるのは『ロゴス』だと言うよう強いられている（アナンカゼタイ）」、後者は「本質存在の定義を手がけた最初の人はデモクリトスであったが、自然の研究にとって必然的なものと考えてそうしたのではなく、事柄そのものに促されて（エクペロメノス）のことであった」というものである（古典叢書版の拙訳を使用したか、本訳書に合わせて一部を変更した）。『形而上学』A（第一）巻にも『動物部分論』第一巻にも、何かを勧告する文章——前者は冒頭の第一章と第二章のアリストテレス的な知恵の探求の勧め、後者は最後の第五章の生物学の勧め——が含まれており、この種の勧告と、事物や事柄の何らかの意味の——たとえであるにせよ——「強制」との関連が暗示されておりこちらも興味深いので参照されたい。

Met.A.3 補注 e 984b5 の「原因を一つよりも多くした人たち」について

984b5 の「原因を一つよりも多くした人たち」でパルメニデスに言及していると解するか（アレクサンドロスと Bonitz）、あるいはそうではなくエンペドクレスに言及していると解するか（Ross）で、意見が分かれている。パルメニデス説は、詩の第二部「思惑の道」の彼を考えるのであれば一応つじつまは合う上に、第一部の彼のつづきで第二部の彼を論じるのは自然な流れだとも言えよう。

しかし、「一方、他方」の対比や「より可能」という比較の語り方は、Ross の言うように、同一人物に使うにはたしかに違和感があるだろう。他方で、Ross 自身が指摘するようにエンペドクレス説にも困難がある。それは、以下の b 八で「それらの人たち… [中略] …が登場した後で」の「それらの人たち」のなかにエンペドクレスが含まれているとすると、それらの人たちが登場した「後で」現れる人たちのなかにもまたエンペドクレスが入っている（次章に登場する）ことである。

これに対する Ross の応答は次のようなものである。すなわち、ここまでアリストテレスが語っていた思想家は、始動因を全然認識しなかったか、あるいは素材因のどれか一つに一種の始動的な因果性を割り当てたかした人たちであった。次の文でアリストテレスが着手するのはもっと最近の思想家グループで、彼らは素材因とは別個にそして或る意味では目的因の代わりになるものとして始動因を認識した人たちである。それでエンペドクレスは始動因のはたらきを火にも「愛と争い」にも割り当てた。だから彼は、より昔のグループにも最近のグループにも属している。つまり彼は昔のグループの最後のメンバーであり、また最近のグループの最初のメンバーでもある。したがって、エンペドクレスがここで登場していながら、再び後で登場していても、かまわないのである。

これに対して、Betegh 2012, p. 136, n. 74 は、Ross に説得されなかったとは言うものの、Ross への内在的批判をしないが、テオプラストスがすでにパルメニデス説を採っていたことに言及している。

私自身は、議論の巧妙さや整合性の点から Ross を支持したいと考えている。

Met.A.3 補注 f 984b11 における「[[それらの] 後につづく始原（ヘー・エコメネー・アルケー）」という言葉は何を指すのかについて

この問題は、「それら」が指すものと関係している。「それら」とは、少し前の 984b8 に出てくる「以

上のような始原（ハイ・トイアウトアイ・アルカイ）」を指しているのです、こちらが指すものを先に考えなければならない。

ここで進行中のいわゆる「哲学史」的な原因再調査が始まったのは、タレスの「素材因（従来の訳語の『質料因』）」からであったのは明らかである。これに対して、984a16からはそれだけが原因のすべてではないという論点が登場し、984a25で「別の始原」として「動が由来する始原」いわゆる始動因が現れる。

このような文脈から素朴に考えれば、984b8の「以上のような始原」とは素材因と始動因のことになる。すると、984b11における「[[それらの] 後につづく始原」とは、素材因と始動因以外でなければならないことになろう。そこで、984b11の後を読むと、善く美しいことの原因について議論され、アナクサゴラスの「ヌース（理性）」が挙げられている。この「善く美しいことの原因」は、目的因であるように見える。このことから単純に考えれば、「[[それらの] 後につづく始原」とは、目的因だということになろう。

この明白に思える推論を Ross, I, pp. 135-136 が疑うテキスト上の根拠は、この章の成果を次の章で振り返っている箇所が二つ（九八五 a 一〇以下と b 二〇以下）あるのだが、どちらの箇所でも論じられた原因は合計三つになるはずなのに二つとされており目的因が含まれていないという事実である。すなわち、九八五 a 一〇以下では、

「たしかに、私たちが言っているように、彼らは、しかも以上のように説明されうる限りのところまでは、二つの原因をつかんでいたのだ。それらは、私たちが自然についての諸論考において規定しておいたいくつかの原因に属しているもので、すなわち「素材」と「その動の由来」である。」

そして b 二〇以下では、

「動について、これがどこから始まって、あるいはどのようにして「あるもの」に属しているのかという〔始動因の〕問題は、その他の人たちの場合と同様、彼らもまた重視せず放置した。さてそういうわけで、これら二つの原因〔＝素材因と始動因〕については、ちょうど私たちが言っているように、以上のことだけのことが私たちよりも先に探求されていたように思われる。」

とされている。

そうであれば、第三章では目的因が扱われていなかったとするほかに思われる——そしてどういう意味で「扱われていなかった」のか明らかにする必要がある——わけである。他方でしかし、第三章の 984b11 の後で、善く美しいことの原因について議論され、アナクサゴラスの「ヌース（理性）」が挙げられていることも、つまり、目的因が論じられているように見えることも考慮に入れる必要があろう。したがって、第三章で、或る意味では目的因が論じられているが、別の意味では論じられていないと解する必要がある。また、アナクサゴラスの「ヌース」が目的因よりむしろ始動因だとされていると解する必要もあり、そのようにされる場合の観点も明確にしなければならない。

このような課題を Ross は引き受ける。すなわち、「何が事物を動かすのか」の探求は、その探求の本来の答えであるところの「始動因のはっきりとした観念」へと道が通じていなかった一方で、「なぜ事物は善く秩序づけられているのか」という目的因の問いがその「始動因のはっきりとした

観念」へと通じていたのである（Barneyの表現では、本来なら目的因を明らかにしたはずの難問が「始動因の遅きに失した発見」を結果したのである）。エンペドクレスやアナクサゴラスは、目的因の観念に全く到達しなかった。そして、始動因ないし機械的原因の「純粋な観念」を得ることもなかった。なぜなら彼らは、「知性」や「欲望」の観念を目的ではなく「力」の観念と結びつけたからである。

たしかにアナクサゴラスは事物の秩序の原因を探求はした。しかし、彼はこれを、「実現されるべき目的」によっては説明しなかった。事物に先行して存在し事物を秩序づけた「理性」によって説明したのである。彼は、他の人たちに目的因を確信させた思考のラインに手をつけはしたが、彼自身は目的因を把握するまでに至らなかった。その思考のラインは、彼に始動因を確信させたわけだが、素材因のどれか一つに「ものを動かすはたらき」を割り当てた人たち——「ものを[上方へ]動かす力のあるものとして火はその自然本性をもつとし、水や土やそういったものは反対の仕方でもつとしている」（第三章九八四b六～八）人たち——と比べれば、より明瞭な形で始動因を彼に把握させたのである。原因としての愛について語ったエンペドクレスですら、これについて目的論的に考えたわけではない。つまり、「何らかの目的のために手段を選択するもの」としては扱わず、単に「構成要素を組織するもの」として、また「それらの要素から成る生きものたちを和合させるもの」として扱ったのである。

それで、984b8の「以上のような始原」とは「素材因と『始動因のはたらきが割り当てられた素材因』——言わば『純粋でない始動因』」であり、984b11における「[それらの]後につづく始原」は、単に始動因のはたらきを「素材」に割り当てたのではない「純粋な始動因」のことなのだ。Rossはその考察を締めくくる。

さて私はRossのこの解釈を支持したい。彼が挙げる文脈上の理由の他にも、第四章九八五a一〇の以下のまとめの文とその流れにあるa一八以下での次のようなアナクサゴラス評に適合しているからである。

「[985a10] たしかに、私たちが言っているように、彼らは、しかも以上のように説明されうる限りのところまでは、二つの原因をつかんでいたのだ。それらは、私たちが自然についての諸論考において規定しておいたいくつかの原因に属しているもので、すなわち「素材」と「その動の由来」である。しかし、彼らがそれらの原因をつかむ仕方は、ほんやりとしており、つまりは全く明瞭さを欠くものであって、… [中略] …明らかに彼らは、前述の二つの原因を、ほとんどの場合で使っていないか、わずかな場合でしか使っていないかなのである。[985a18] すなわち、アナクサゴラスは、世界を作り出すための仕掛けとして「知性」を用いている。実際、彼は、どのような原因のゆえに「必然的にそのようであるか」で説明が行き詰ってしまったとき [985a20]、「知性」を導入している。しかし、他の数多くの場合においては、生じてくるものの原因を「知性」以外に帰しているのだ。」

さらに付け加えれば、本巻第一章と第二章にはプラトンを下敷きにしたたりプラトンの発想や言いまわしを用いたりした箇所が数多く確認できるのだが、ここでも、プラトンの『パイドン』においてソクラテスが、アナクサゴラスの「ヌース」に言わば目的因としての役割を期待したのに、アナクサゴラスは世界に最初の一撃を与えることしか「ヌース」にさせておらず失望したことと、アリストテレスの記述をパラレルにできる利点もあるからである。Barneyも、Rossの説明が、ここで取り上げた箇所にある「どちらにも解せるあいまいな性格」や「人を困惑させる性質」の説明に大

いに役立つと評価している。

・テキスト註

Met.A のテキスト註 01

「何かを」と訳した原語「ティ」を、底本は有力な α 系写本にしたがって読んでいない（Ross や Jaeger も同様である）。しかし拙訳は、Golitis 2016, 468, n. 27 の提案にしたがい、 β 系写本のように「ティ」を入れて読むことにした（Bekker と Bonitz も同様。なお、Golitis は、「ティ」が α から機械的に脱落してしまったと推定している）。

もちろん一般的には α が尊重されるべきなのだが、この箇所の「グノーリゼイン」に目的語を——「何か」ではないとしても「事物」や「物事」など——を設定しないとそもそもうまく訳せない。また、Golitis が言うように、限定をつけずに「知る」（ないし「認識する」）などと訳せば、まるで「知性」の行う学問的・専門的なそれであるかのようなニュアンスが出てしまい、比較的低次な感覚の話をしている文脈にもうまく合わない。

たしかに本章冒頭の「エイデナイ」には何も目的語がないのであるから、こちらの「グノーリゼイン」にも目的語はなくてもよいように（むしろ積極的に合わせるべきだとさえ）思われるかもしれない。しかし、ここではすでに感覚の話題に入っているのであるから、Golitis が「感覚される個別的なもの」のことだとしている「何か」はあった方がよい。

また、『形而上学』A（第一）巻における「グノーリゼイン」の能動相の（問題の箇所 980a26 以外の）用例は八つ（A.1: 981a21-22, 981a30, 981b6, A.2: 982a24, 982b5-6; A.3: 983a26; A.9: 992b25-26, 992b30）あり、五例（A.1: 981a21-22, 981a30, 981b6, A.2: 982a24,; A.3: 983a26）は目的語を、一例（現在分詞の A.2: 982b5-6）は「何のため」という間接疑問をとっており、残る二例（A.9: 992b25-26, 992b30）は目的語がないが文脈的に「幾何学の知識」（普遍）か「イデア」（原因）を対象としている。この事実も、問題の箇所で目的語を残す立場にとって有利にはたらくであろう。（なお、「グノーリゼイン」の目的語に来るのは、「普遍（981a21-22, 982a24）」または「原因（981a30, 981b6, 983a26）およびその一種の目的因（982b5-6）」である。これらについては、「認識する」と訳した。目的語が明示的でない 992b25-26, 992b30 は、「知る」を使っておいた。）

ただし、「ティ」が機械的に脱落したということには証拠がなく、その点は弱いと言わねばならない。しかし、得られるメリットの方が大きいと私は判断した。

Met.A のテキスト註 02

近代の主要校訂者たち（Ross や Jaeger など）が採用した β 系の写本のそれ自体としては読みやすい本文、すなわち、

“ταῦτα φρονιμώτερα καὶ μαθητικώτερα ... ἐστὶ”

では、

「それら 〔記憶することのできる動物〕の方が、利口で且つ学習することに適したものである」

と訳すことになるが、 β 系の写本は一般に信頼度が劣るだけでなく、直後で「利口だが学習する

ということはない」動物に言及されていることにも反している。

したがって、これまで採られてきたβ系の写本のこの読みやすい本文はあえて採らない。代わりに、α系の写本を基礎にした底本の次のような提案を採る。こちらであれば、「利口だが教え込まれることはない」動物に言及されていることに反しない読みが可能になる（「一方で（タ・メン）…他方で（タ・デ）…」という構文に変わるのだ）。ただし、部分的にはかえって困難になる（「一方が」の形容詞がそのままでは比較級になっていないのだ）。それゆえ、β系の写本の読みの一部を結局取り入れることが必要になる。すなわち、

“τὰ μὲν φρονιμὶ <ώτερ> α τὰ δὲ μαθητικώτερα … ἐστὶ”

となり、これに基づき、

「一方は利口なものであり、他方は学習するのに適したものである」

と訳したのである。

Met.A のテキスト註 03

底本の「ホローメン（私たちは目にしている）」（α系写本にある）を、Ross は読んでいない（β系写本によっている）ので、Ross を底本にしている邦訳3種にもこの部分はない。β系写本では直前の 981a13 の「ドケイ（思われており）」もないが、Ross は残しており一貫していない。よく似た言いまわしのある 981a1-2 には「ドケイ」があるので、それに合わせたのかもしれない。

文献

- Alexander Aphrodisiensis, 1891, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. M. Haydock. (*Commentaria in Aristotelem Graeca*, Vol. I), Berlin.
- Apostle, H. G., tr., 1966, *Aristotle's Metaphysics. Translated with Commentary and Glossary*. Bloomington and London.
- Asclepius, 1888, *In Aristotelis Metaphysicorum Libros A-Z Commentaria*. ed. M. Haydock. (*Com. in Ar. Gr.*, Vol. VI-2), Berlin.
- Barney, R., 2012, History and Dialectic (*Metaphysics* A 3, 983a24-984b8). In: Steel, 2012. 69-104.
- Bekker, I., ed., 1831, *Aristotelis Opera*, Berlin.
- Betegh, G., 2012, 'The Next Principle' (*Metaphysics* A 3-4, 984b8-985b22). In: Steel, 2012. 105-140.
- Broadie, S., A Science of First Principles (*Metaphysics* A 2). In: Steel, 2012. 43-67.
- Bonitz, H., 1848-49/1992, *Commentarius in Aristotelis Metaphysicam*. 2 Vol. Bonn. (Reprint: Olms Verlag, Hildesheim/Zürich/New York)
- Bonitz, H., 1870, *Index Aristotelicus (Aristotelis Opera Omnia, Bd. 5)*. Berlin.
- Bonitz, H., 1890, *Aristoteles Metaphysik. Aus dem Nachlass herausgegeben von Eduard Wellmann*. Berlin.
- Cambiano, G., 2012, The Desire to Know (*Metaphysics* A 1). In: Steel, 2012. 1-42.
- Curd, P. and Graham, D. W. edd., 2008, *The Oxford Handbook of Presocratic Philosophy*. Oxford.
- Delatte, L., Rutten, Chr., Govaerts, S. et J. Denooz, edd., 1984, *Aristoteles Metaphysica: Index Verborum, Listes de Fréquence*. Hildesheim · Zürich · New York.

- Denniston, J. D., 1934, *The Greek Particles*. 2nd ed. Oxford.
- Fazzo, S., 2016, Aristotle's *Metaphysics* -Current Reserch to Reconcile Two Branches of the Tradition. *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 98, 433-457.
- Frede, M., 2008, Aristotle's Account of the Origins of Philosophy. In: Curd and Graham edd. 2008. 501-529.
- 藤澤令夫 訳〔部分訳〕, 1972年, アリストテレス「形而上学」第一巻〔第七章まで〕, 世界の名著『ギリシアの科学』所収, 中央公論社, 123-152。
- Golitis, P., 2016, Editing Aristotle's *Metaphysics*: A Response to Silvia Fazzo's Critical Appraisal of Oliver Primavesi's Edition of *Metaphysics Alpha*. *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 98, 458-473.
- 廣川洋一 訳・解説, 2011年, 『アリストテレス「哲学のすすめ」』, 講談社学術文庫。
- 出隆 訳〔全訳〕, 1959年, 『アリストテレス「形而上学」』, (上)(下)全二冊, 岩波文庫。
- 岩崎勉 訳〔全訳〕, 1994年(単行本初版は昭和17年), 『アリストテレス「形而上学」』, 講談社学術文庫。
- Jaeger, W., ed. 1957, *Aristotelis Metaphysica*. (Oxford Classical Texts) Oxford.
- 川田殖 訳〔部分訳〕, 1977年, アリストテレス「形而上学」第一巻〔第二章まで〕, 世界の思想家『アリストテレス』所収, 平凡社, 76-87。
- Kirk, G. S., Raven, J. E. and Schofield, M., 1957 (1st. ed.)/1983 (2nd. ed.), *The Presocratic Philosophers: A Critical History with a Selection of Texts (Second Edition)*. Cambridge University Press. /邦訳: G・S・カーク, J・E・レイヴン, M・スコフィールド 著, 内山勝利・木原志乃・國方栄二・三浦要・丸橋裕 訳, 2006年, 『ソクラテス以前の哲学者たち 第2版』, 京都大学学術出版会。[引用や言及は邦訳版を用いる。]
- Lawson-Tancred, H., tr., 1999, Aristotle *Metaphysics*. *Translated with an Introduction*. (Penguin Classics). London.
- Mansfeld, J., 2011, Aristotle on Anaxagoras in Relation to Empedocles in *Metaphysics A*. *Philologus*, Vol. 155, 2011, 361-366.
- 長田弘 著, 2015年, 『全詩集』, みすず書房, 東京。
- Primavesi, O., 2012, Aristotle *Metaphysics A: A New Critical Edition with Introduction*. In: Steel, 2012. 385-516. [底本]
- Reeve, C.D.C., tr., 2016, *Aristotle Metaphysics. Translated with Introduction and Notes*. Indiana.
- Rolfes, E., tr., 1904, *Aristoteles' Metaphysik. Übersetzt und mit einer Einleitung und erklärungen versehen*. 2 Bde., (PhB, 2 & 3), Leipzig.
- Ross, W. D., ed. 1924, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text With Introduction and Commentary*. 2 vols., Oxford.
- Ross, W. D., tr. 1928, *Metaphysica*. 2nd ed. (*The Works of Aristotle*, Vol. VIII), Oxford.
- 坂下浩司, 2002, 『アリストテレスの形而上学——自然学と倫理学の基礎——』, 岩波書店, 東京。
- Schwarz, F. F., tr. 1970, *Aristoteles Metaphysik: Schriften zur Ersten Philosophie*. Stuttgart.
- Steel C., ed., 2012, *Aristotle's Metaphysics Alpha. With a new critical edition of the Greek Text by Oliver Primavesi*. Oxford.
- Syrianus, 1902, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. G. Kroll. (*Com. in Ar. Gr.*, Vol. VI-1), Berlin.
- 田中美知太郎・藤澤令夫 編, 1974-78年, 『プラトン全集』全15巻・別巻1, 岩波書店, 東京。
- 田中美知太郎・松平千秋 著, 1968年, 『ギリシア語文法』, 岩波書店, 東京。
- Thomas Aquinas, 1950, *In duodecem Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio*. ed. Cathala, M. R. et R. M. Spiazzi, Roma.
- Tredennick, H., tr. 1933, *Aristotle Metaphysics: Books I-IX*. (Loeb Classical Library). Cambridge and London.
- Tricot, J., tr. 1986, *Aristote La Métaphysique. Nouvelle Édition Entièrement Refondue, avec Commentaire*. 2 vols. Paris.
- 内山勝利 編, 1996-1998年, 『ソクラテス以前哲学者断片集』全5分冊・別巻1, 岩波書店。
- 内山勝利・神崎繁・中畑正志 編, 2013年 - (刊行中), 『アリストテレス全集』全20巻・別巻1, 岩波書店。[「新・アリストテレス全集」と呼ぶ]

- ・本訳と注解は, 平成30年度～令和3年度科学研究費基盤研究(C)(一般)課題番号18K00022 研究課題名「哲学の勧め及び哲学の歴史と歴史の哲学に関するアリストテレスの第一哲学構想

の研究」の研究成果の一部である。